

第9章

主クリシュナのまえで他界した ビーシュマデーヴァ

第1節

सूत उवाच

इति भीतः प्रजाद्रोहात्सर्वधर्मविवित्सया ।
ततो विनशनं प्रागाद् यत्र देवव्रतोऽपतत् ॥ १ ॥

スータ ウヴァーチャ
sūta uvāca

イティ ビヒータハ プラジャー・ドウローハートウ
iti bhītaḥ prajā-drohāt

サルヴァ・ダハルマ・ヴィヴィトウサヤー
sarva-dharma-vivitsayā

タトー ヴィナシャナンム プラーガードウ
tato vinaśanam prāgād

ヤトゥラ デーヴァ・ヴラトー パタトゥ
yatra deva-vrataḥ 'patat

sūtaḥ uvāca—シュリー・スータ・ゴースヴァーミーが言った; *iti*—こうして; *bhītaḥ*—
~を恐れて; *prajā-drohāt*—臣下たちの殺害のため; *sarva*—すべて; *dharma*—宗教上の行
為; *vivitsayā*—理解のために; *tataḥ*—そのあと; *vinaśanam*—戦いがあった場所;
prāgāt—彼は行った; *yatra*—その場所; *deva-vrataḥ*—ビーシュマデーヴァ; *apatat*—他
界のために横たわっている。

スータ・ゴースヴァーミーが言った。「クルクシェートラの戦場で数多くの臣下が殺さ
れたことに心を痛めていたマハーラージャ・ユディシュティラは、大量虐殺が起こった場
所へ行った。そこには、いましも臨終の時を迎えようとしていたビーシュマデーヴァが槍
の寝台に横たわっていた」

要旨解説

この第9章では、主シュリー・クリシュナが望んだように、ビーシュマデーヴァがユデ
ィシュティラ王へ、本務上の義務について教えをさずけています。ビーシュマデーヴァは、

現世を去るときに主に祈りを捧げ、その結果、さらなる物質界での生涯という束縛から解放されました。ビーシュマデーヴァは、自分の意志で物質界を去るという力を授かっており、矢のベッドに横たわることもみずから選んだことです。偉大な戦士の臨終に、当時の名士たちすべてが注目し、偉大な魂に愛情と敬意と真心をしめすためにその場所に集まりました。

第2節

तदा ते भ्रातरः सर्वे सदश्वैः स्वर्णभूषितैः ।
अन्वगच्छन् रथैर्विप्रा व्यासधौम्यादयस्तथा ॥ २ ॥

タダー テー プララータラハ サルヴェー
tadā te bhrātaraḥ sarve

サダシュヴァイヒ スヴァルナ・ブーシタイヒ
sadaśvaiḥ svarṇa-bhūṣitaiḥ

アンヴァガッチャン ラタハイル ヴィプラー
anvagacchan rathair viprā

ヴァーサ・ダハウミヤダヤス タタハー
vyāsa-dhaumyādayas tathā

tadā—そのとき; *te*—彼ら全員; *bhrātaraḥ*—兄弟たち; *sarve*—一緒に; *sat-aśvaiḥ*—一流の馬に引かれた; *svaṛṇa*—金; *bhūṣitaiḥ*—〜で飾られて; *anvagacchan*—あいついで従った; *rathaiḥ*—馬車の上で; *viprāḥ*—おおブラーフマナたちよ; *vyāsa*—聖者ヴァーサ; *dhaumya*—ダウミヤ; *ādayaḥ*—そして他の人々; *tathā*—もまた。

そのとき、ユディシュティラ王の兄弟たちも、黄金の装飾品で飾られた見事な馬が引く華麗な戦闘馬車に乗って王につづいた。そのあとに、ヴァーサやダウミヤ（パーンダヴァ家の博識な僧侶）といったリシたちも従った。

第3節

भगवानपि विप्रर्षे रथेन सधनञ्जयः ।
स तैर्व्यरोचत नृपः कुवेर इव गुह्यकैः ॥ ३ ॥

バハガヴァーン アピ ヴィプラルシェー
bhagavān api viprarṣe

ラテハーナ サ・ダハナンジャヤハ
rathena sa-dhanañjayaḥ

サ タイル ヴァローチャタ ヌリパハ
sa tair vyarocata nṛpaḥ

クヴェーラ イヴァ グヒヤカイヒ
kuvera iva guhyakaiḥ

bhagavān—人格主神（シュリー・クリシュナ）；api—もまた；vipra-ṛṣe—ブラーフマナたちのなかの聖者よ；rathena—馬車の上で；sa-dhanañjayaḥ—ダナンジャヤ（アルジュナ）とともに；saḥ—主；taiḥ—彼らによって；vyarocata—ひじょうに高貴な人物に見えた；nṛpaḥ—王（ユディシュティラ）；kuvera—半神の宝物の管理者クヴェーラ；iva—として；guhyakaiḥ—グヒヤカという仲間たち。

ブラーフマナのなかの聖者よ。主シュリー・クリシュナもアルジュナの馬車に座ってあとにつづいた。ユディシュティラ王は、あたかも同士たち[グヒヤカ・Guhyaka]を率いるクヴェーラのように、ひじょうに高貴な人物として際だって見えた。

要旨解説

主シュリー・クリシュナは、パーンダヴァたちが気品に満ちた王族としてビーシュマデーヴァのまえに姿を見せることを望んでいました。ビーシュマデーヴァが、他界するときはその様子を見て、至福感に包まれることを願ったからです。クヴェーラは半神のなかでもっとも富を持つ人物で、この節でユディシュティラ王はそのクヴェーラのように映えた、と描写されています。それは、シュリー・クリシュナをともなうその行列が、ユディシュティラ王の威厳にふさわしかったからです。

第4節

दृष्ट्वा निपतितं भूमौ दिवश्च्युतमिवामरम् ।
प्रणमुः पाण्डवा भीष्मं सानुगाः सह चक्रिणा ॥ ४ ॥

ドゥリシュトウヴァー ニパティタンム プフーマウ
dṛṣṭvā nipatitaṁ bhūmau

ディヴァシュ チュタンム イヴァーマランム
divaś cyutam ivāmaram

プラネームフ パーンダヴァー ビヒシュマンム
praṇemuḥ pāṇḍavā bhīṣmaṁ

サーヌガーハ サハ チャクリナー
sānugāḥ saha cakriṇā

dṛṣṭvā—そのように見ている；nipatitam—横たわっている；bhūmau—地面に；

divaḥ—空から; *cyutam*—落ちた; *iva*—のように; *amaram*—半神; *praṇemuh*—ひれ伏した; *pāṇḍavāḥ*—パンドウの子息たち; *bhīṣmam*—ビーシュマに; *sa-anugāḥ*—弟たちと; *saha*—も一緒に; *cakriṇā*—主（輪宝を持っている）。

その人物（ビーシュマ）が、あたかも空から舞い降りてきた半神のように地面に横たわっている様を見て、パンドヴァ家のユディシュティラ王は、弟たち、そして主クリシュナとともにビーシュマのまえにひれ伏した。

要旨解説

主クリシュナは、マハーラージャ・ユディシュティラの年下のいとこであり、またアルジュナの親友でもありました。しかし、パンドヴァ家の人々は主クリシュナが人格主神であることをよく知っていました。主も自分の至高の立場を認識したうえで社会の慣習に従い、このときも、ユディシュティラ王の弟たちのひとりであるかのように、臨終をひかえたビーシュマデーヴァにひれ伏したのです。

第5節

तत्र ब्रह्मर्षयः सर्वे देवर्षयश्च सत्तम ।
राजर्षयश्च तत्रासन् द्रष्टुं भरतपुरावम् ॥ ५ ॥

タトウラ ブラフマルシャヤハ サルヴェー
tatra brahmarṣayaḥ sarve

デーヴァルシャヤシュ チャ サッタマ
devarṣayaś ca sattama

ラージャルシャヤシュ チャ タトウラーサン
rājarṣayaś ca tatrāsan

ドウラシュトウナム バハラタ・ブンガヴァナム
draṣṭum bharata-ṇṅavam

tatra—そこに; *brahma-ṛṣayaḥ*—ブラーフマナのなかのリシたち; *sarve*—全員; *deva-ṛṣayaḥ*—半神のなかのリシたち; *ca*—そして; *sattama*—徳に置かれている; *rāja-ṛṣayaḥ*—王のなかのリシたち; *ca*—そして; *tatra*—その場所に; *āsan*—いた; *draṣṭum*—ただ見るために; *bharata*—バラタ王の子孫; *ṇṅavam*—の筆頭者。

バラタ王の子孫の筆頭者（ビーシュマ）を見ようと、宇宙中の徳の偉大な魂、すなわち半神のなかのリシ、ブラーフマナ、王たちが次々に集結した。

要旨解説

リシとは、精神的修養を達成して完璧な境地に入った人物を指します。精神的達成は、王や修行僧にかぎられずだれにでも得られます。ビーシュマデーヴァ自身がブラフマリシのひとりであり、バラタ王の子孫の筆頭者でした。リシはだれであろうと徳にいます。そのような人々がすべて、この偉大な戦士が死を迎えようとしている知らせを聞いて、この場所に集まってきたのでした。

第6－7節

पर्वतो नारदो धौम्यो भगवान् बादरायणः ।
बृहदश्वो भरद्वाजः सशिष्यो रेणुकासुतः ॥ ६ ॥
वसिष्ठ इन्द्रप्रमदस्त्रितो गृत्समदोऽसितः ।
कक्षीवान् गौतमोऽत्रिश्च कौशिकोऽथ सुदर्शनः ॥ ७ ॥

パルヴァトー ナーラドー ダハウミョー
parvato nārado dhaumyo

バハガヴァーン バーダラーヤナハ
bhagavān bādarāyaṇaḥ

ブリハダシュヴォー バハラドゥヴァージャハ
bṛhadaśvo bharadvājaḥ

サシッショー レーヌカー・スタハ
saśiṣyo reṇukā-sutaḥ

ヴァシシュタハ インドウラプラマダス
vasiṣṭha indrapramadas

トゥリトー グリトゥサマドー シタハ
trito grtsamado 'sitaḥ

カクシーヴァーン ガウタモー トウリシュ チャ
kakṣivān gautamo 'triś ca

カウシコー タハ スダルシャナハ
kauśiko 'tha sudarśanaḥ

parvataḥ—パルヴァタ・ムニ; *nāradaḥ*—ナーラダ・ムニ; *dhaumyaḥ*—ダウミヤ;
bhagavān—主神の化身; *bādarāyaṇaḥ*—ヴァーサデーヴァ; *bṛhadaśvaḥ*—ブリハダシュ
ヴァ; *bharadvājaḥ*—バラドゥヴァージャ; *sa-śiṣyaḥ*—弟子たちと; *reṇukā-sutaḥ*—パラ
シュラーマ; *vasiṣṭhaḥ*—ヴァシシュタ; *indrapramadaḥ*—インドウラプラマダ; *tritaḥ*—
トゥリタ; *grtsamadaḥ*—グリトゥサマダ; *asitaḥ*—アシタ; *kakṣivān*—カクシーヴァーン;

gautamaḥ—ガウタマ; atriḥ—アトリ; ca—そして; kauśikaḥ—カウシカ; atha—～もまた; sudarśanaḥ—スダルシャナ。

パルヴァタ・ムニ、ナーラダ、ダウミヤ、神の化身ヴァーサ、ブリハダシュヴァ、バラドゥヴァージャ、弟子たちを率いたパラシュラーマ、ヴァシシュタ、インドウラプラマダ、トゥリタ、グリトウサマダ、アシタ、カクシーヴァーン、ガウタマ、アトリ、カウシカ、スダルシャナといった聖者たちもそこにいた。

要旨解説

パルヴァタ・ムニ (Parvata Muni) 最年長の聖者のひとりで、ほとんどいつもナーラダ・ムニと行動をとともにしています。物質的機械を使わずに空間を移動できる超越的宇宙飛行士です。パルヴァタ・ムニは、ナーラダのように、半神たちの筆頭者である大聖者です。マハーラージャ・パリークシットの子息であるマハーラージャ・ジャナメージャヤの儀式にナーラダと出席しましたが、この儀式では世界中の蛇が殺されました。パルヴァタ・ムニとナーラダ・ムニはガンダルヴァ (Gandharva) とも呼ばれますが、それは主の栄光を歌いながら宇宙を旅することができるからです。そのような力を持っていたことから、ふたりはドゥラウパディーのスヴァヤンヴァラの儀式 (夫を選ぶ儀式) を空から見ていました。またナーラダ・ムニのように、インドラ王が住む天国の王族たちをよく訪ねています。ガンダルヴァでもあるこの聖者は、重要な半神のひとりクヴェーラの宮殿を訪ねることがありました。ナーラダもパルヴァタも、一度マハーラージャ・スリンジャヤの娘との問題に巻きこまれたことがありました。マハーラージャ・スリンジャヤはパルヴァタ・ムニから息子を授かるという恩恵を授かっています。

ナーラダ・ムニ (Nārada Muni) プラーナとは切っても切れないかわりのある聖者です。『シュリーマド・バーガヴァタム』にも登場しています。前世で女中の息子でしたが、純粋な献愛者たちとのすばらしい交流をとおして献愛奉仕に目覚め、次の世で、完璧な人と呼ぶにふさわしい人物になりました。『マハーバーラタ』でもその名前は多く登場します。主要なデーヴァルシ (devarṣi)、半神の筆頭の聖者でもあります。そしてブラフマジーの子息、そして弟子でもあり、この人物からブラフマーの師弟継承が伝わっています。ナーラダ・ムニに入門した人々に、プラフラーダ・マハーラージャ、ドウルヴァ・マハーラージャ、そして数多くの主の名高い献愛者がいます。ヴェーダ經典の編纂者であるヴァーサデーヴァでさえ弟子として受けいれ、さらにヴァーサデーヴァはマドゥヴァーチャーリヤを受けいれ、こうしてガウディーヤ・サンプラダーヤを発祥させたマドゥヴァ・サンプラダーヤが宇宙全体に広がりました。シュリー・チャイタンニヤ・マハープラブはこのマドゥヴァ・サンプラダーヤに属しています。つまり、ブラフマジー、ナーラダ、ヴァーサ、そしてマドゥヴァ、チャイタンニヤ、ゴースヴァーミーたちに至る師弟継承は同じ線上に

属しているということです。ナーラダジーは太古の昔から多くの王たちを入門させています。『シュリーマド・バーガヴァタム』を読むと、母親の体のなかにいたプラフラダ・マハーラージャに教えをさずけている記述があり、またクリシュナの父であるヴァスデーヴァに、そしてマハーラージャ・ユディシュティラにも教えをさずけています。

ダウミヤ (Dhaumya) ウトウコーチャカ・ティールタ (Utkocaka Tirtha) で厳しい苦行をした偉大な聖者で、パーンダヴァ王家の僧侶に任命されています。パーンダヴァ兄弟たちの数多くの宗教儀式 (サムスカーラ) で主宰僧として働き、また5人がドウラウパディーと婚約式をするときにも、この聖者は兄弟ひとりひとりの式に参列しています。パーンダヴァ兄弟が追放されたときには、1年間人知れず住む方法などを助言し、5人ともその教えを厳格に守りとおしました。ダウミヤの名は、クルクシェートラの戦いが終わったあとの葬式のときにも出てきます。『マハーバーラタ』の「アヌシャーサナ・パルヴァ」(第127章・第15-16節)では、マハーラージャ・ユディシュティラに宗教上の教えを詳細に説いています。ダウミヤこそ、世帯者を導く僧侶としてふさわしい人物です。パーンダヴァたちに正しい宗教の道を教えることができたからです。僧侶の仕事は、世帯者をアーシュラマ・ダルマ (āśrama-dharma)、つまり特定の階級の正しい職務上の義務について積極的に導くことにあります。家族の僧侶と精神指導者にはほとんど違いがありません。聖者、聖人、ブラーフマナは、とくにそのような機能をはたす人々をいいます。

バーダラーヤナ (Bādarāyaṇa ヴァーサデーヴァ) クリシュナ、クリシュナ・ドウヴァイパーヤナ、ドウヴァーパーヤナ、サチャヴァティー・スタ、パーラーシャリヤ、パーラシャラトウマジャ、バーダラーヤナ、ヴェーダヴァーサなどの名前でも知られている人物です。マハームニ・パーラシャラとサチャヴァティーの間に生まれた子であり、サチャヴァティーがマハーラージャ・シャンタヌ (偉大な将軍である祖父ビーシュマデーヴァの父) との婚約前にもうけています。ナーラーヤナの強力な化身で、ヴェーダ知識を世界に広めました。そのためヴァーサデーヴァは、ヴェーダ経典、とくにプラーナの吟唱のまえに敬意をこめて讃えられています。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーはその子息であり、ヴァイシャンパーヤナといったリシたちはヴェーダのさまざまな学派を司る弟子たちです。偉大な叙事詩『マハーバーラタ』、そして超越的文献『シュリーマド・バーガヴァタム』の著者でもあり、『ブラフマ・スートラ』(『ヴェーダ Tantra・スートラ』)や『バーダラーヤナ・スートラ』も編纂しました。聖者たちのなかでも、ヴァーサデーヴァは厳しい苦行の力ゆえに、もっとも尊ばれています。カリ時代の人々が幸せになれるよう壮大な叙事詩『マハーバーラタ』を記録したいと考えたとき、自分が口述する内容を書きとめる力量のある執筆者がどうしても必要になりました。ブラフマジーの命を受け、シュリー・ガネーシャジーがその記録を任せられ、ヴァーサデーヴァがその口述を一瞬たりとも止めることなく語りつづけるという条件で、記録が始まりました。こうして、『マハーバーラタ』は、ヴァーサデーヴァとガネーシャの協力のもとで編纂されました。

母親で、のちにマハーラージャ・シャンタヌと結婚したサテャヴァティーの命令を受けて、そしてシャンタヌ王とその最初の妻であるガンジスとの間に生まれたビーシュマデーヴァの依頼を受けて、ヴァーサデーヴァはドウリタラーシュトウラ、パードウ、ヴィドゥラという立派な3人の息子をもうけました。クルクシェートラの戦争のあと、そしてこの叙事詩の英雄たちがすべて亡くなったあとに『マハーバーラタ』を編纂しています。この叙事詩が初めて語られたのは、マハーラージャ・パリークシットの子であるマハーラージャ・ジャナメージャヤの宮殿でした。

ブリハダシュヴァ (Bṛhadāśva) マハーラージャ・ユディシュティラとよく会っていた老齢の聖者です。ふたりは最初にカーミャヴァナで会いました。マハーラージャ・ナラの伝記を語った聖者でもあります。イクシュヴァーク王家の子で同名の聖者がいますが、『マハーバーラタ』の「ヴァナ・パルヴァ (第209章・第4-5節)」にその記述があります。

バラドゥヴァージャ (Bharadvāja) 7人の大聖者のひとりで、アルジュナの誕生の儀式のときに出席していました。卓越した精神的力をそなえたこのリシは、ときにガンジス川の岸辺で厳しい修行しました。この聖者のアーシュラマはいまでもプラヤーガダーマ (Prayāgadhāma) で褒めたたえられています。ガンジス川で沐浴をしていたとき、天上から舞い降りてきた美しい乙女グリタチー (Ghṛtaci) を目にしたため射精しました。精液は土器に保存され、その精液からドウローナ (Droṇa) が誕生しました。つまり、ドウローナーチャーリヤはバラドゥヴァージャ・ムニの子、ということになります。いっぽう、ドウローナの父親は別人であるとする異論もあります。バラドゥヴァージャはブラフマーの偉大な従者でした。ドウローナーチャーリヤにクルクシェートラの戦争をやめさせるよう依頼したことがあります。

パラシュラーマ (Paraśurāma) ・別名レーヌカースタ (Reṇukāsuta) マハリシ・ジヤマダグニとシュリーマティー・レーヌカーのあいだに誕生した人物です。レーヌカにちなんでレーヌカースタ (Reṇukāsuta) とも呼ばれています。神の強力な化身で、クシャトリヤ階級者を21回にわたって殺し、そのクシャトリヤたちの血で、先祖の魂たちを喜ばせました。のちに、マヘンドウラ・パルヴァタで厳しい修行に打ちこみました。地球全土からクシャトリヤをすべて一掃したあと、その地球をカッシャパ・ムニに施しました。パラシュラーマはダヌル・ヴェーダ (Dhanur-veda) 「軍事科学」を、ブラーフマナだったドウローナーチャーリヤにさずけました。マハーラージャ・ユディシュティラの戴冠式に出席し、他の偉大なリシたちとその出来事を祝福しています。

パラシュラーマはラーマとクリシュナに別々に会っていますが、それほどの年長者でした。ラーマと一戦をまじえ、クリシュナを至高人格主神として認めました。またクリシュナといっしょにいたアルジュナを讃えたことがあります。ビーシュマはアンバー (Ambā) という女性に求婚されましたが、その申し出を断りました。そこでアンバーはパラシュラーマに会い、ビーシュマを説得するよう頼みました。頼まれたパラシュラーマはアンバ

ーを妻としてめとるようもちかけます。ビーシュマデーヴァにとってパラシュラーマは自分の精神指導者のひとりだったのですが、断わりました。その結果、ふたりのあいだに激しい争いが起こりました。結局、パラシュラーマはビーシュマの武勇に満足し、世界屈指の戦士になる恩恵をさずけました。

ヴァシシュタ (Vasiṣṭha) ブラフマナたちのあいだで讃えられている偉大な聖者で、ブラフマリシやヴァシシュタデーヴァという名前でも知られています。『ラーマーヤナ』と『マハーバーラタ』が語られた双方の時代で名高い人物で、人格主神シュリー・ラーマの戴冠式を祝福し、クルクシェートラの戦争のときにもいました。高位・下位いずれの惑星にも行くことができ、その名前はヒラニャカシプの歴史にも関係があります。むかし、望みをかなえる牛・カーマデーヌ (kāmadhenu) を欲しがったヴィシュヴァーミトゥラとのあいだに大きな不和が生じたことがあります。ヴァシシュタ・ムニはカーマデーヌを与えることを拒絶し、対抗したヴィシュヴァーミトゥラはヴァシシュタの100人の息子を殺しました。完全なブラフマナだったこの聖者は、ヴィシュヴァーミトゥラのたびかさなる嘲笑に堪えました。ヴィシュヴァーミトゥラの虐待に苦しんだ聖者は自殺を試みましたが、どうしても死ぬことができませんでした。崖から飛びおりれば転落した岩場が綿に変わり、海に飛びこめば波が聖者を岸まで戻す。川に飛びこんでも、やはり岸边に打ちあげられる。なんと試みても死にきれなかった——そんな逸話が残っています。ヴァシシュタ・ムニは7人の聖者のひとりで、有名な星の主宰神でもあるアルンダティー (Arundhati) の夫でもあります。

インドラプラマダ (Indrapramada) 名高いリシのひとり。

トゥリタ (Trita) プラジャーパティ・ガウタマの3人の子息のひとり。三番目の子で、他の二人は、エーカトゥ (Ekat) とドウヴィタ (Dvita) という名前で知られています。3人とも優れた聖者で、宗教原則に厳格に従いました。厳しい苦行の力で、やがてブラフマローカ (ブラフマーが住む惑星) に高められました。トゥリタが井戸に転落した逸話が残っています。この聖者は多くの儀式にかかわる人々を采配し、偉大な聖者のひとりであったことから、臨終の床にあったビーシュマジに敬意をしめすために現われました。ヴァルナローカ (Varuṇaloka) に住む7人の聖者のひとりでもあります。当時の西洋諸国から来ました。そのため、おそらく欧州諸国の出身だと思われます。当時は、世界は1つのヴェーダ文化のもとで治められていました。

グリトウサマダ (Gr̥tsamada) 天上の王国に住む聖者のひとり。天国の王インドラの親友であり、ブリハスパティに匹敵するほどの偉大な聖者でした。マハーラージャ・ユディシュティラの宮殿を訪ねることがよくあり、ビーシュマデーヴァが最後の息を引きとるときにも居合わせました。ときに主シヴァの栄光をマハーラージャ・ユディシュティラに説くことができました。ヴィタハヴァの子で、容姿がインドラによく似ていたため、インドラの敵が見まちがえて捕らえられたことがあります。リグ・ヴェーダを司る偉大な学者

であることから、ブラーフマナ社会から深い敬意を集めています。独身者として生涯を送り、あらゆる分野で力を発揮していました。

アシタ (Asita) 同名の王がいますが、この節で述べられているアシタはアシタ・デーヴァラ・リシという当時の偉大で力強い聖者です。自分の父親に『マハーバーラタ』の150万の節について説明しました。マハーラージャ・ジャンメージャヤが執行した蛇のいけにえ儀式に、そしてユディシュティラ王の戴冠式にも他の偉大なりシたちと出席しています。ユディシュティラ王がアンジャンナの丘にいたときに、教えをさずけました。主シヴァの従者のひとりでもあります。

カクシーヴァーン (Kakṣivān) ガウタマ・ムニの子息のひとりで、偉大な聖者チャンダカウシカ (Candakausika) の父親です。マハーラージャ・ユディシュティラが率いる議会の一員でもあります。

アトゥリ (Atri) アトゥリ・ムニは偉大なブラーフマナ聖者で、ブラフマジの心から作られた子息のひとりです。ブラフマジは子どもを作ることを考えるだけで創造できる力をそなえています。そうして作られた息子をマーナサ・プトウラ (mānasa-putra) といいます。ブラフマジが作った7人の偉大なマーナサ・プトウラのひとりがアトゥリでした。アトゥリの家系に偉大なプラチェーターたち (Pracetā) が誕生しています。ほかに、王になった2人のクシャトリヤの息子をもうけています。アルタマ王がそのひとりです。アトゥリ・ムニは21人のプラジャーパティのひとりとされています。妻の名前をアナスーヤー (Anasūyā) といいます。この聖者はマハーラージャ・パリークシットの盛大な儀式に協力しました。

カウシカ (Kauśika) マハーラージャ・ユディシュティラの王家に属するリシのひとりで、ときどき主クリシュナに会っています。同じ名前をもつ聖者が数人います。

スダルシャナ (Sudarśana) スダルシャナという輪宝 (りんぼう) は人格主神 (ヴィシュヌあるいはクリシュナ) の武器で、最強の武器とされ、ブラフマーストラなどの破壊的な武器を凌ぐ力があります。ヴェーダ経典には、火の神アグニデーヴァがこの武器を主シュリー・クリシュナに贈ったとされていますが、じっさいは、主だけにそなわった武器です。アグニデーヴァがこの武器をクリシュナに与えたことは、マハーラージャ・ルクマがルクミニをクリシュナに送ったことと同じ意味合いがあります。主は献愛者からのそのような贈り物を、じっさいは永遠に自分の所有物であっても、受けいれます。この武器については『マハーバーラタ』の「アーディ・パルヴァ」に詳しく説明されています。主シュリー・クリシュナは、敵対していたシシュパーラをこのスダルシャナで殺しました。また、シャルヴァもこの武器で殺し、ときには、アルジュナが敵を殺害するときはこの武器を使ってほしいと思っていました (『マハーバーラタ』「ヴィラータ・パルヴァ」第56章・第3節)。

第8節

अन्ये च मुनयो ब्रह्मन् ब्रह्मरातादयोऽमलाः ।
शिष्यैरुपेता आजग्मुः कश्यपारिरसादयः ॥ ८ ॥

アニュー チャ ムナヨー ブラフマン
anye ca munayo brahman

ブラフマラーターダヨー マラーハ
brahmarātādayo 'malāḥ

シッシャイル ウペーター アージャグムフ
śiṣyair upetā ājagmuḥ

カッシャパーンギラサーダヤハ
kaśyapāṅgirasādayaḥ

anye—他の多くの; *ca*—もまた; *munayaḥ*—聖者たち; *brahman*—おおブラーフマナたちよ; *brahmarāta*—シュカデーヴァ・ゴースヴァーミー; *ādayaḥ*—そしてそのような他の者たち; *amalāḥ*—完全に純粋な; *śiṣyaiḥ*—弟子たちとともに; *upetāḥ*—伴って; *ājagmuḥ*—到着した; *kaśyapa*—カッシャパ; *āṅgirasa*—アーンギラサ; *ādayaḥ*—他の者たち。

さらに、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーをはじめとする純粋な魂たち、カッシャパ、アーンギラサたち聖者たちが、弟子を伴ってその場に到着した。

要旨解説

シュカデーヴァ・ゴースヴァーミー（ブラフマラータ） シュリー・ヴァーサデーヴァの名高い子息そして弟子で、父から『マハーバーラタ』と『シュリーマド・バーガヴァタム』を教わりました。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーは、ガンダルヴァ、ヤクシャ、ラークシャサたちの集まりのなかで『マハーバーラタ』の140万の節を吟唱し、マハーラージャ・パリークシットのまえで初めて『シュリーマド・バーガヴァタム』を吟唱しました。偉大な父親をとおしてすべてのヴェーダ経典を徹底的に研究しました。このようにして、宗教原則に関する広大な知識の力によって完全に純粋になった聖者です。『マハーバーラタ』の「サバー・パルヴァ」（第4章・第11節）からは、マハーラージャ・ユディシュティラの宮殿や、マハーラージャ・パリークシットが絶食していたときに居合わせていたことがわかります。父であるシュリーラ・ヴァーサデーヴァの正しい弟子として、宗教原則や精神的価値について広範囲にわたって質問をしました。偉大な父親も、精神界に行くことのできるヨーガ体系について説き、果報的活動と経験知識の違い、精神的悟りを得るための道と方法、4つのアーシュラマ（学習者、世帯者、隠遁、出家の生活）、至高人格主

神の崇高な境地、主に巡りあえる方法、知識を授かるための真の候補者、5要素に関する考察、知性という独特の要素、物質自然と生命体の意識、自己を悟った魂の兆候、肉体の機能原則、影響を及ぼす自然の様式の兆候、永遠な望みという木、そして靈魂の活動などについて教え、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーを満足させました。ときには、父親とナーラダジーの許しを得て太陽に行っています。この聖者が宇宙を旅することに関する説明は、『マハーバーラタ』の「シャーンティ・パルヴァ」(第332節)に記述されています。最終的に超越的世界に帰っていきました。別名として、アラネーヤ (Araṇeya)、アルニスタ (Aruṇisuta)、ヴァイヤーサキ (Vaiyāsaki)、ヴァーサートウマジャ (Vyāsātmaja) などが知られています。

カッシャパ (Kaśyapa) プラジャーパティのひとりで、マリーチの子、そしてプラジャーパティ・ダクシャの義理の子息で、象や亀を食糧とする巨大な鳥ガルダ (Garuḍa) の父です。プラジャーパティ・ダクシャの13人の娘たちと結婚しました。その娘たちの名前は、アディティ (Aditi)、ディティ (Diti)、ダヌ (Danu)、カーシュター (Kāṣṭhā)、アリシュター (Ariṣṭā)、スラサー (Surasā)、イラー (Ilā)、ムニ (Muni)、クロードヴァシャー (Krodhavaśā)、タームラー (Tāmṛā)、スラビ (Surabhi)、スラマー (Saramā)、ティミ (Timi) です。この妻たちから半神や悪魔を含む数多くの子どもをもうけました。最初の妻アディティからは12人のアーディチャが誕生し、そのひとりに主神の化身であるヴァーマナがいます。偉大な聖者カッシャパは、アルジュナが生まれるときに居合わせました。パラシュラーマから全世界を贈り物として授かり、のちにパラシュラーマにその世界から出ていくよう頼んでいます。別名でアリシュタネーミ (Ariṣṭanemi) と呼ばれ、現在は宇宙の北側に住んでいます。

アーンギラサ (Āṅgīrasa) マハルシ・アーンギラーの子で、ブリハスパティ、すなわち半神の僧侶として知られています。ドゥローナーチャーリヤはこの聖者の部分的化身と言われています。悪魔たちの精神指導者であるシュクラチャーリヤに戦いを挑んだことがあります。息子の名前はカチャ (Kaca) といいます。アーンギラサはバラドゥヴァージャ・ムニに最初に火の武器をさずけました。名高い星の女神でもある妻のチャンドウラマーシー (Candramāsi) から6人の息子を得ています (火の神がそのひとり)。宇宙を旅することができるため、ブラフマローカやインドラローカにも入ることができます。天上の王インドラに悪魔を撃退する方法について助言をしたことがあります。あるときインドラを呪い、豚に変えて地球に落としました。ところが、天国にもどる機会が与えられたというのに、豚になったインドラは帰ることをためらいました。これが幻想・マーヤが作り出す魅惑の力です。豚でさえ、天上の王国と引き替えに地球の暮らしを捨てたがらないのです。アーンギラサはさまざまな惑星の住人に宗教原則について教えています。

第9節

तान् समेतान् महाभागानुपलभ्य वसूत्तमः ।
पूजयामास धर्मज्ञो देशकालविभागवित् ॥ ९ ॥

ターン サメーターン マハー・バハーガーン
tān sametān mahā-bhāgān

ウパラビヤ ヴァスूत्ताマハ
upalabhya vasūttamaḥ

プूजヤヤンム アーサ ダハルマ・ギョー
pūjayām āsa dharma-jñō

デーシャ・カーラ・ヴィバハーガヴィトウ
deśa-kāla-vibhāgavit

tān—彼ら全員; *sametān*—共に集まった; *mahā-bhāgān*—全員が強大な力を持っている; *upalabhya*—受けいれて; *vasu-uttamaḥ*—ヴァスのなかで最善の人物(ビーシュマデーヴァ); *pūjayām āsa*—歓迎した; *dharma-jñāḥ*—宗教原則を知る者; *deśa*—場所; *kāla*—時; *vibhāga-vit*—場所と時間の調整の仕方を知る者。

8人のヴァスのなかでもっとも優れたビーシュマデーヴァは、集まった偉大で力強いリシたちを快く迎えた。時と場所に応じて、宗教原則すべてを知りつくしていたからである。

要旨解説

熟達した宗教者は、時と場所に応じて宗教原則を整える方法をよく知っています。世界中の偉大なアーチャーリヤ、説教徒、改革者は、自分の使命を、時や場所に合わせて実践してきました。世界にはさまざまな気候や環境があり、主の言葉を広める責務を感じる人は、時と場所に応じて臨機応変に対応しなくてはなりません。ビーシュマデーヴァは、献愛奉仕の教えを説く偉大な12人の権威者のひとりでしたから、臨終を迎える自分に会おうと宇宙の各地から集まってきた大聖者たちを喜んで迎えることができました。もちろん、自宅にいたわけでも健康な状態でもなかったため、人をもてなす状態にはありませんでした。しかし、健全な心で心のこもった優しい言葉を語り、集まってきた人々は快く迎えられるました。義務は、体の動き、心、言葉で遂行することができます。ビーシュマデーヴァは、それらを適切な場所で使う方法を熟知しているため、体では対応できなかったものの、聖者たちを難なく迎えることができたのです。

第 10 節

कृष्णं च तत्प्रभावज्ञ आसीनं जगदीश्वरम् ।
हृदिस्थं पूजयामास माययोपात्तविग्रहम् ॥ १० ॥

クリシュナンム チャ タトウ・プラバハーヴァ・ギヤ
kṛṣṇam ca tat-prabhāva-jñā

アーシーナンム ジャガドウ・イーシュヴァランム
āsīnam jagad-īśvaram

フリディ・スタハンム プージャヤーンム アーサ
hṛdi-stham pūjayām āsa

マーヤヨーパーッタ・ヴィグラハンム
māyayopātta-vigraham

kṛṣṇam—主シュリー・クリシュナに; *ca*—もまた; *tat*—主の; *prabhāva-jñāḥ*—その栄光を知る者(ビーシュマ); *āsīnam*—座っている; *jagat-īśvaram*—宇宙の主; *hṛdi-stham*—心のなかにいる; *pūjayām āsa*—崇拜した; *māyayā*—内的勢力によって; *upātta*—現わした; *vigraham*—姿。

主シュリー・クリシュナはだれもの心のなかにいる。しかしなおかつ、内なる力を使って人々のまえにその崇高な姿を現わす。いま、その主がビーシュマデーヴァのまえに座っている。ビーシュマデーヴァも主の栄光をよく知っている人物であったから、主を正しく崇拜したのである。

要旨解説

主の全能の力は、すべての場所に同時に存在することでしめされます。つねにゴーローカ・ヴリンダーヴァンに住み、それでもすべての魂の心のうちにいます。目に見えない原子のなかにでさえ。永遠で崇高な姿として物質界に現われるとき、主は内なる力を使います。外在の力、つまり物質エネルギーは、主の永遠の姿とはまったく関係がありません。この真実はシュリー・ビーシュマデーヴァにはすべてわかっていたことでしたから、そのような思いで主を崇拜したのでした。

第 11 節

पाण्डुपुत्रानुपासीनान् प्रश्रयप्रेमसूतान् ।
अभ्याचष्टानुरागाश्रैरन्धीभूतेन चक्षुषा ॥ ११ ॥

パンドウ・プトウラーン ウパーシーナーン
pāṇḍu-putrān upāsīnān

ブラシュラヤ・プレーマ・サンガターン
praśraya-prema-saṅgatān

アビヤチャシュターヌラーガーシュライル
abhyācaṣṭānurāgāśrair

アンディーブフーテーナ チャクシュシャー
andhībhūtena cakṣuṣā

pāṇḍu—すでに他界しているマハーラージャ・ユディシュティラの父親、そして兄弟たち; *putrān*—～の子息たち; *upāsīnān*—すぐ近くに静かに座っている; *praśraya*—圧倒されて; *prema*—愛情を感じつつ; *saṅgatān*—集まって; *abhyācaṣṭa*—祝った; *anurāga*—思いをこめて; *aśraiḥ*—歓喜の涙で; *andhībhūtena*—感きわまって; *cakṣuṣā*—彼の目に。

マハーラージャ・パンドウの子息たちが、臨終を迎えようとする祖父の近くに静かに座っている。その様を見たビーシュマデーヴァは、心からかれら祝福した。その目からは歓喜の涙が流れている。愛情と慈しみの念に感極まったのである。

要旨解説

マハーラージャ・パンドウが亡くなったあと、まだ幼かった子どもたちは、当然のことながら、王家の年長者たち、とくにビーシュマデーヴァの愛情のもとで育てられました。時がたち、成長したパンドヴァ兄弟たちはずるがしこいドゥリヨーダナとその一味に騙されました。ビーシュマデーヴァは、パンドヴァたちに落ち度はなく、理不尽に問題に巻きこまれていることを知っていたのですが、政治的なしがらみのために、パンドヴァたちの側につくことができませんでした。人生の幕を引こうとしていたビーシュマデーヴァは、マハーラージャ・ユディシュティラをはじめとしたもっとも高尚な孫たちが、目のまえに穏やかな表情で座っている様子を見たとき、この偉大な戦士である祖父は、愛しさゆえに自然にあふれだす涙をおさえることができませんでした。ひじょうに敬虔な孫たちが味わってきた耐えがたい試練を思いだしたのです。もちろん、ユディシュティラ王がドゥリヨーダナに代わって王位に就いたのですから、いま誰よりも満足しているのはビーシュマにほかなりません。こうしてビーシュマデーヴァは兄弟たちを祝福しはじめたのです。

第12節

अहो कष्टमहोऽन्याय्यं यद्वयं धर्मनन्दनाः ।
जीवितुं नार्हथ चि षं विप्रधर्माच्युताश्रयाः ॥ १२ ॥

アホー カシュタンム アホー ニヤイヤンム
aho kaṣṭam aho 'nyāyāṃ

ヤドゥ ユーヤンム ダハルマ・ナンダナーハ
yad yūyam dharma-nandanāḥ

ジーヴィトウンム ナールハタハ クリシュタンム
jīvitum nārhattha kliṣṭam

ヴィプラ・ダハルマーチュターシュラヤーハ
vipra-dharmācyutāśrayāḥ

aho—おお; kaṣṭam—なんというひどい苦しみ; aho—おお; anyāyam—なんというむごい仕打ちだろう; yat—の理由で; yūyam—あなたたちは善良なる魂たちばかりである; dharma-nandanāḥ—宗教の権化の息子たち; jīvitum—生き続ける; na—決してない; arhattha—～にふさわしい; kliṣṭam—苦しみ; vipra—ブラーフマナたち; dharma—敬虔であること; acyuta—神; āśrayāḥ—～に守られて。

ビーシュマデーヴァが言った。「宗教の権化であるおまえたちが、なんという恐ろしい苦しみやむごい仕打ちを受けたことか。とうてい生きつづけられるはずのない苦境にあったのに、それでもおまえたちはブラーフマナ、神、宗教に守られていた」

要旨解説

マハーラージャ・ユディシュティラはクルクシェートラの戦いで起こった大量虐殺に心を痛めていました。ビーシュマデーヴァはその心を感じとっていたため、はじめに、ユディシュティラ王の計りしれない苦しみについて言及したのです。不正の巻き添えになって苦境に立たされていたのであり、クルクシェートラの戦いはその不正を正すためにおこなわれたものです。ですから、大量虐殺について思い悩むことはなかったのです。祖父がとくに言いたかったのは、兄弟たちはいつもブラーフマナたち、主、宗教原則に守られていた、という事実です。この重要な3つのことに守られていれば、挫折感にさいなまれることはありません。ビーシュマデーヴァはこのようにユディシュティラ王に語りかけ、悲観することはない、と励ましました。なにもかも主の意志に従い、本物のブラーフマナやヴァイシュナヴァに導かれ、そして宗教原則に従っていれば、どれほど辛い状況に立たされても、失望する原因はどこにもありません。ビーシュマデーヴァは権威者のひとりとして、このことをパーンダヴァたちに知ってほしかったのです。

第13節

संस्थितेऽतिरथे पाण्डौ पृथा बालप्रजा वधुः ।
युष्मत्कृते बहून् चो शान् प्राप्ता तोकवती मुहुः ॥ १३ ॥

サンムスティテー ティラテヘー パーンドウ
samsthite 'tirathe pāṇḍau

プリタハー バーラ・ブラジャー ヴアドウーフ
pṛthā bāla-prajā vadhūḥ

ユシュマトウ・クリテー バフーン クレーシャーン
yuṣmat-kṛte bahūn kleśān

プラープター トーカヴァティー ムフフ
prāptā tokavatī muhuḥ

samsthite—死去したあと; ati-rathe—偉大な将軍; pāṇḍau—パンドウ; pṛthā—クン
ティー; bāla-prajā—幼い子どもたちと共に; vadhūḥ—私の義理の娘; yuṣmat-kṛte—お前
たちのために; bahūn—さまざまな; kleśān—苦悩; prāptā—受けた; toka-vatī—成長した
息子たちにもかかわらず; muhuḥ—いつも。

義理の娘クンティーは、偉大な将軍パンドウが死去したために5人の子どもをかかえ
た未亡人となり、苦難の日々を送ってきた。そのうえ、おまえたちが成長したいまでも、
おまえたちの生き様ゆえに生じる大きな苦しみに巻きこまれてきた。

要旨解説

クンティーデーヴィーは二重の悲しみに襲われました。若くして未亡人になり、王家の
人間として幼い5人の子どもたちを育てなくてはならず、やがて成長した我が子たちの行
動ゆえに生じる苦しみにもさいなまれたのです。これは、クンティーデーヴィーは、神の
摂理によって苦しむ定めにあったということです。私たちはそのような境遇に戸惑うこと
なく、堪え忍ばなくてはなりません。

第14節

सर्वं कालकृतं मन्ये भवतां च यदप्रियम् ।
सपालो यद्वशे लोको वायोरिव घनावलिः ॥ १४ ॥

サルヴァンム カーラ・クリタンム マニエー
sarvaṁ kāla-kṛtaṁ manye

バハヴァターンム チャ ヤドゥ・アプリアンム
bhavatām ca yad-apriyam

サパーロー ヤドゥ・ヴァシェー ローコー
sapālo yad-vaśe loko

ヴァーヨル イヴァ ガハナーヴァリヒ
vāyor iva ghanāvaliḥ

sarvam—これらすべて; kāla-kṛtam—避けられない時によって; manye—私は思う;

bhavatām ca—おまえたちにとっても; *yat*—なんであつても; *apriyam*—不快な;
sa-pālah—支配者の; *yat-vaśe*—その時の支配下で; *lokaḥ*—すべての惑星にいるすべての
者; *vāyoḥ*—風が運ぶ; *iva*—のように; *ghana-āvaliḥ*—雲の流れ。

私が思うに、それは避けることのできない「時」によるものである。雲が風に流されるように、全惑星の全住民が時によって動かされている。

要旨解説

全惑星が「時」に支配されているように、宇宙の全空間も「時」に支配されています。太陽を含む巨大な惑星すべてが空気の流れに動かされており、それは雲が空気の流れに流されているのと同じです。同じように、だれも逃れられないカーラ (*kāla*) 「時」は、空気の流れや他の要素さえ支配しています。いっさい万物が、主の物質界における圧倒的な力の現われである至高のカーラによって支配されているということです。ですから、ユディシュティラ王は、生命体には想像も及ばない時の動きに心を乱されるべきではありませんでした。だれであつても物質界の条件に左右されるのですから、時が作りだす動・反動を耐えなくてはなりません。ユディシュティラ王は「自分は前世で罪をおかしたから苦しんでいるのだ」と考えましたが、そうではありません。もっとも敬虔な人でさえ、物質自然界の制約ゆえに苦しめられるものです。しかし、敬虔な人は宗教原則に従っている正しいブラーフマナとヴァイシュナヴァに導かれているため、主に信念を持っています。この3つの導きの原則を人生の目的としなくてはなりません。永遠な時のからくりで心を乱されてはなりません。宇宙最大の支配者であるブラフマジーでさえ、時の支配を受けています。ですから、宗教原則に正しく従う者として生きていようとも、時に支配されていることを恨んではなりません。

第15節

यत्र धर्मसुतो राजा गदापाणिर्वृकोदरः ।
कृष्णोऽस्त्री गाण्डिवं चापं सुहृत्कृष्णस्ततो विपत् ॥ १५ ॥

ヤトウラ ダルマ・ストー ラジャ
yatra dharma-suto raja

ガダー・パーニル ヴリコーダラハ
gadā-pāṇir vṛkodaraḥ

クリシュノー ストゥリー ガーンディヴァンム チャーパンム
kṛṣṇo 'strī gāṇḍivam cāpaṁ

スフリトゥ クリシュナス タトー ヴィパトゥ
suhṛt kṛṣṇas tato vipat

yatra—～があるところ； dharma-sutaḥ—ダルマラージャの子； rājā—王；
gadā-pāṇiḥ—手に強力な戦闘棒を持ち； vṛkodaraḥ—ビーマ； kṛṣṇaḥ—アルジュナ；
astrī—武器を持つ者； gāṇḍivam—ガンディーヴァ； cāpaṃ—弓； suhṛt—幸せを願う者；
kṛṣṇaḥ—主クリシュナ、人格主神； tataḥ—それについて； vipat—逆境。

なんという霊妙なる時の力！ 避けられないのだ——さもなければ、宗教を支配する半神の子・ユディシュティラ王がいるのだから、このような逆境が起こるはずがないではないか。戦闘棒を巧みに操る戦士ビーマ、強力な武器ガンディーヴァを手にする偉大な射手アルジュナ、そしてとりわけ、パーンダヴァ家の幸福を願う主がいるというのに。

要旨解説

パーンダヴァ兄弟は、物質精神両面で十分に支えられていました。物質面では、ふたりの偉大な戦士ビーマとアルジュナに支えられていました。精神面では、王自身が宗教の象徴とも言える人物でしたし、それにもまして人格主神主シュリー・クリシュナが兄弟たちの暮らしを「幸福を願う者」としてみずから見守っていました。にもかかわらず、5人の生涯は受難の連続でした。善行の力があっても、高潔な人格の力があっても、主クリシュナみずから操る武器の力があっても、パーンダヴァたちイバラの道を歩かなくてはなりません。カーラという逃れられない時の力としか説明が付きません。カーラは主そのものですから、その影響力とは、説明できない主自身の意志の表われにほかなりません。ある出来事が人間にはどうしようもない力で起こるのであれば、嘆いてもしかたのないことです。

第16節

न ह्यस्य कर्हिचिद्राजन् पुमान् वेद विधित्सितम् ।
यद्विजिज्ञासया युक्ता मुह्यन्ति कवयोऽपि हि ॥ १६ ॥

ナ ヒ アッシャ カルヒチドウ ラージャン
na hy asya karhicid rājan

プマーン ヴェーダ ヴィデイトウシタンム
pumān veda vidhitsitam

ヤドウ ヴィジギャーサヤー ユクター
yad vijigñāsayā yuktā

ムヒャンティ カヴァヨー ピ ヒ
muhyanti kavayo 'pi hi

na—決してない； hi—確かに； asya—主の； karhicit—なんであつても； rājan—王よ；

pumān—だれでも; veda—知っている; vidhīsitam—計画; yat—であるもの;
vijijñāsayā—徹底的な質問で; yuktāḥ—従事して; muhyanti—当惑して; kavayah—偉大
な哲学者たち; api—でさえ; hi—確かに。

王よ。主（シュリー・クリシュナ）にどのような計画があるのか、だれにもわからない。
偉大な哲学者たちがどれほど徹底的に追求しても、当惑されるばかりである。

要旨解説

自分は過去の悪事の結果として苦しんでいるのでは——というマハーラージャ・ユディ
シュティラの当惑は、12人の権威者のひとりで偉大な権威者であるビーシュマによって完全
に否定されています。ビーシュマはマハーラージャ・ユディシュティラにわかってほしい
と思っていました、太古の昔から、だれであろうと、シヴァやブラフマーのような半神た
ちでさえ、主のほんとうの計画はわからなかった、ということ。ならば、私たちにわか
るはずがありません。聞いても無駄な質問です。聖者たちが徹底的な哲学的に追求しても
主の計画は確かめられません。ひたすら主の命令に従うことが最善策です。パーンダヴァ
兄弟たちの苦しみは、過去のおこないから生じたものではありません。主は、美德の王国
を築く計画を実現させる必要があります、そして美德による征服を確かなものにするためにも
献愛者たちが一時的に苦しむことは避けられませんでした。ビーシュマデーヴァは、その
美德の勝利を目のあたりにして心から満足しており、剣を交えはしましたが、ユディシュ
ティラが晴れて王位に就いたことを見て嬉しく思いました。偉大な戦士であったビーシュ
マでさえクルクシェートラの戦争で勝ちどきをあげることはできませんでした。主は、邪
悪な心を持つ者はだれでも、決して美德には太刀打ちできないことを世にしめしたいと思
っていました。ビーシュマデーヴァは偉大な献愛者ではありましたが、主の意志によって、
パーンダヴァ兄弟と交戦することを選びました。主は、ビーシュマほどの大將軍であって
も、間違った側につけば必ず敗北するという世に宣言したかったのです。

第17節

तस्मादिदं दैवतन्त्रं व्यवस्य भरतर्षभ ।
तस्यानुविहितोऽनाथा नाथ पाहि प्रजाः प्रभो ॥ १७ ॥

タスマードウ イダンム ダイヴァ・タントウランム
tasmād idam daiva-tantram

ヴァヴァッシャ バハタタルシャバハ
vyavasya bharatarṣabha

タッシャーヌヴィヒトー ナータハー
tasyānuvihito 'nāthā

ナータハ パーヒ プラジャーハ プラボホー
nātha pāhi prajāḥ prabho

tasmāt—ゆえに; idam—この; daiva-tantram—神意という不可思議な力だけで; vyavasya—確認すること; bharata-ṛṣabha—バラタの子孫のなかの第一人者よ; tasya—主によって; anuvihitaḥ—望んだように; anāthāḥ—無力; nātha—主人よ; pāhi—大切に保護しなさい; prajāḥ—臣民たちの; prabho—おお、主よ。

バラタ家の子孫の第一人者（ユディシュティラ）よ。ゆえに私は断言する、これまで起こったことは、どれも主の計画どおりだったのだ。人智を絶する主の計画を受けいれ、従いなさい。いまや、おまえは正式に選ばれた行政の長であり、これからは、頼る王のいない臣民を守っていかなくてはならない。

要旨解説

主婦は娘に教えることで義理の娘に教える、とよく言われています。同じように、主は献愛者をとおして世界の人々に教えます。誠実な献愛者はいつも心のなかから主に導かれているため、主から新しいことを学ぶ必要はありません。ですから、『バガヴァッド・ギター』がそうだったように、献愛者に教えがさずけられるのは、じつは知性の足りない人のためなのです。ですから献愛者は、なにかの試練を主からの恩恵として快く受けいれなくてはなりません。パーンダヴァ兄弟はビーシュマデーヴァに、ためらうことなく国を治める責任を受けいれよ、と助言されました。哀れな国民は、クルクシェートラの戦争が勃発したためにいまはだれにも守られていない状態にあり、マハーラージャ・ユディシュティラが権力を行使することを待ちのぞんでいます。純粋な献愛者は、自分の苦難を主からの恩寵と考えます。主は絶対的な方ですから、主が授けるものは、苦しみであろうと恩恵であろうと同じことなのです。

第18節

एष वै भगवान् साक्षादाद्यो नारायणः पुमान् ।
मोहयन्मायया लोकं गूढश्चरति वृष्णिषु ॥ १८ ॥

エーシャ ヴァイ バハガヴァーン サークシャードウ
eṣa vai bhagavān sākṣād

アーデョー ナーラーヤナハ プマーン
ādyo nārāyaṇaḥ pumān

モーハヤン マーヤヤー ローカンム
mohayan māyayā lokam

ゲーダハシュ チャラティ ヴリシュニシュ
gūḍhaś carati vṛṣṇiṣu

eṣaḥ—この; vai—明確に; bhagavān—人格主神; sākṣāt—根源の; ādyah—最初の人物; nārāyaṇaḥ—至高主(水のうゑに横たわる方); pumān—至高の享樂者; mohayan—当惑させる; māyayā—主の自己創造の力によって; lokam—惑星; gūḍhaḥ—人智を絶した方; carati—動く; vṛṣṇiṣu—ヴリシュニ家のなかで。

ここにおられるシュリー・クリシュナは、私たちには想像も及ばない根源の人格主神その方だ。最初のナーラーヤナ、つまり至高の享樂者である。しかし、いまヴリシュニ王の子孫たちにまじって、私たちと同じようにふるまっておられる。そうして自己創造の力を使って、私たちを惑わしておられるのだよ。

要旨解説

ヴェーダ知識は演繹(えんえき)法をとおして受けつがれます。権威を託された人物から師弟継承をとおして完璧に受け継がれるのです。知性に欠ける人たちは、そのような知識を独断的なものと感じますが、決してそうではありません。母親は、父親である男性を確認する存在です。母親は、二人だけが知っている出来事の権威者なのです。ですから、権威を独断とするのはまちがいです。『バガヴァッド・ギーター』がこの真実について第4章(第2節)で確証しているように、学問を追求する完璧な方法はまず権威者から授かることにあります。この方法は真理として広く受けいれられているのですが、まちがった論争をする者だけが反対します。たとえば、いまは宇宙船が空を飛ぶ時代ですが、月の裏側に行ってきた、と科学者が言うと、人々はそれを鵜呑みにします——現代科学者を権威者として受けいれているからです。権威者が語り、一般人が信じる。ところが、ヴェーダの説く真理となると、信じてはいけない、と教えこまれています。受けいれても、別の解釈をします。だれもがヴェーダの知識を直接理解しようとしているのですが、愚かなことに、じつはそれを拒否しています。つまり、誤解をしている人はひとりの権威者、つまり科学者を受けいれはするけれども、ヴェーダという権威は否定している、ということです。その結果、人々は墮落していきます。

この節では、シュリー・クリシュナを人格主神あるいは最初のナーラーヤナとして語る権威者の説明が紹介されています。アーチャーリヤ・シャンカラのような非人格論者でさえ、『バガヴァッド・ギーター』の解説書の最初に、ナーラーヤナ・人格主神は物質創造界を超越した方である、と述べています。宇宙は物質創造界のひとつですが、ナーラーヤナはそのような物質的空間を超越しています。

ビーシュマデーヴァは、超越的知識の原則を知る12人のマハージャナ(mahājana)のひとりです。この人物がシュリー・クリシュナを人格主神として確証し、さらに非人格論者

のシャンカラも確証しています。他のアーチャーリヤもこぞってこの言葉を承認しているのですから、シュリー・クリシュナが人格主神であることを受け入れない理由がどこにあるのでしょうか。ビーシュマデーヴァは、主が最初のナーラーヤナであると言っています。この言葉は、『シュリーマド・バーガヴァタム』第10編・第14章・第14節)でも確証されています。クリシュナは最初のナーラーヤナです。精神界 (Vaikuṅṭha・ヴァイクンタ) には数え切れないナーラーヤナが存在し、そのすべてがおなじ人格主神であり、根源の人格主神・シュリー・クリシュナの完全拡張体とされています。根源の主シュリー・クリシュナの姿は最初にバラデーヴァの姿で拡張され、バラデーヴァは別の姿、たとえばサンカルシャナ、プラデムナ、ア Niludda、ヴァースデーヴァ、ナーラーヤナ、プルシャ、ラーマ、ヌリシンハなどの姿に拡張されました。この拡張体はすべて、ヴィシュヌ・タットヴァと同じであり、シュリー・クリシュナはそのすべての完全拡張体の根源です。すなわちシュリー・クリシュナは直接の人格主神だということです。主は物質界を創造した方であり、すべてのヴァイクンタ惑星に住むナーラーヤナとして知られる主宰神でもあります。ですから、主が人間にまじって行動することは、私たちを混乱させる要因のひとつです。そのため主は『バガヴァッド・ギーター』で、愚かな者たちを「主の行動の複雑さを知らないために、主をひとり人間だと考えている」と表現しています。

シュリー・クリシュナにかかわる混乱の原因は、主の2つのエネルギーである内的・外的力が3番目の中間の力に及ぼす影響にあります。生命体は主の中間の力による拡張体であり、ときに内的力に、またときには外的勢力によって惑わされます。シュリー・クリシュナは、内的力による困惑をとおして無数のナーラーヤナに拡張し、精神界で生命体と崇高な愛情交換をします。そして、外的力の拡張体として、物質界で人間、動物、半神のなかに降誕し、さまざまな形の生物になっている生命体とのあいだで、忘れさられた主との絆をふたたび築きます。しかし、主の慈悲を授かっているビーシュマのような偉大な権威者は、そのように困惑することはありません。

第19節

अस्यानुभावं भगवान् वेद गुह्यतमं शिवः ।
 देवर्षिर्नारदः साक्षाद्भगवान् कपिलो नृप ॥ १९ ॥

アッシャーヌバハヴァンム バハガヴァーン
asyānubhāvaṁ bhagavān

ヴェーダ グヒヤタマンム シヴァハ
veda guhyatamaṁ śivaḥ

デーヴァルシル ナーラダハ サークシャードウ
devarṣir nāradaḥ sāksād

asya—主の; *anubhāvam*—栄光; *bhagavān*—もともと力強い方; *veda*—知っている;
guhya-tamam—確信してvery confidentially; *śivaḥ*—主シヴァ; *deva-ṛṣiḥ*—半神たちのなか
の偉大な聖者; *nāradaḥ*—ナーラダ; *sākṣāt*—直接に; *bhagavān*—人格主神; *kapilaḥ*—カピ
ラ; *nṛpa*—王よ。

王よ。主シヴァ、半神たちのなかの聖者ナーラダ、主の化身カピラは、直接の体験をと
おして主の栄光を知りつくしている。

要旨解説

純粋な献愛者はすべてブダ (*budha*)、すなわち、さまざまな超越的愛情奉仕をとおして
主の栄光を知っている人々です。主は無数の完全拡張体の姿を持っていますから、さまざ
まな感情で奉仕を交換している純粋な献愛者もいます。偉大な献愛者としては通常12人、つ
まりブラフマー、ナーラダ、シヴァ、クマーラ、カピラ、マヌ、プラフラーダ、ビーシュ
マ、ジャナカ、シュカデーヴァ・ゴースヴァーミー、バリ・マハーラージャ、ヤマラージ
ャがいます。ビーシュマデーヴァはそのひとりではありますが、主の栄光を知る12人のなか
で3人だけの名前を挙げています。現代の偉大なアーチャーリヤのひとりであるシュリー
ラ・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティー・タークラが主の栄光 (*anubhāva*・アヌ
バーヴァ) について説明しています。それによると、発汗、震撼、泣く、体の変調などの
兆候を表わしている献愛者がアヌバーヴァを最初に実感し、主の栄光を着実に理解するこ
とでその味わいはさらに高められていきます。バーヴァ (*bhāva*) に関するそのようなさま
ざまな境地は、ヤショーダーと主のあいだで (主をひもで縛るという形で)、また愛情の
交換をとおして主がアルジュナの戦闘馬車を操縦するという形で表わされました。このよ
うな主の栄光は主が献愛者に従うという形で表わされましたが、それも別の形で表わされ
た主の栄光でもあります。シュカデーヴァ・ゴースヴァーミーとクマーラは超越的な境地
にいますが、違った種類のバーヴァの境地から主の純粋な献愛者に変貌しました。主から
献愛者に与えられる苦難も、主と献愛者のあいだで交わされる超越的なバーヴァでもあり
ます。主は、「わたしは献愛者を困難な状況に置く、そのことでわたしと超越的なバーヴ
ァを交換し、さらに清められていくのである」と言います。献愛者を物質的なトラブルに
巻きこめば、主はその献愛者を幻想の物質的關係から救わなくてはなりません。物質的な
関係は双方が物質的な楽しみを共有することで成りたっており、それはおもに物質的環境
があってできることです。ですから、その物質的環境が主に取りあげられると、献愛者の
心は、完全に主への超越的な愛情奉仕に引きつけられるようになります。こうして主は、
墮落した魂を物質存在の泥沼から引きあげるのです。主が献愛者に与える苦しみは、邪悪

な行動から生じる苦しみとは違います。主のすべての栄光は、先に挙げたブラフマー、シヴァ、ナーラダ、カピラ、クマラ、ビーシュマのようなマハージャナたちにとくに知られており、かれらの恩寵によって、私たちもその栄光を知ることができます。

第20節

यं मन्यसे मातुलेयं प्रियं मित्रं सुहृत्तमम् ।
अकरोः सचिवं दूतं सौहृदादथ सारथिम् ॥ २० ॥

ヤンム マニヤセー マートウレーヤンム
yam manyase mātuleyam

プリヤンム ミトウランム スフリッタマンム
priyam mitram suhṛttamam

アカローホ サチヴァンム ドウータンム
akaroḥ sacivam dūtām

サウフリダードウ アタハ サーラティンム
sauhṛdād atha sārathim

yam—その方; manyase—そなたが考えている; mātuleyam—いところ; priyam—ひじょうに愛しい; mitram—友人; suhṛt-tamam—強く幸福を願う者; akaroḥ—実行した; sacivam—相談する; dūtām—使者; sauhṛdāt—友好的な気持ちで; atha—そこで; sārathim—御者。

王よ。そなたが、ただ無知ゆえに、いところ・愛しい友・幸福を願ってくれる者・相談相手・使者・恩人などと考えていた人物は、人格主神、シュリー・クリシュナその方である。

要旨解説

主シュリー・クリシュナは、パーンダヴァ兄弟のいところ・兄弟・友・幸せを願う者・相談者・使者・恩人などとして行動していましたが、じつは至高人格主神その方でした。主はいわれのない慈悲心から、そして穢れのない献愛者に対する好意から、言われるままに仕えてきましたが、だからといって、絶対的な人物でなくなったわけではありません。主をふつうの人間と思うのは救いようのない無知です。

第21節

सर्वात्मनः समदृशो ह्यद्वयस्यानहङ्कृतेः ।
तत्कृतं मतिवैषम्यं निरवद्यस्य न क्वचित् ॥ २१ ॥

サルヴァートウマナハ サマ・ドウリショー
sarvātmanah sama-dṛśo

ヒ アドゥヴァヤッシャーナハククリテーハ
hy advayasyānahankṛteḥ

タトウ・クリタンム マティ・ヴァイシャミヤム
tat-kṛtam mati-vaiṣamyam

ニラヴァデヤッシャ ナ クヴァチトウ
niravadyasya na kvacit

sarva-ātmanah—だれもの心のなかにいる方の; *sama-dṛśah*—すべての人々に等しく親切な方の; *hi*—確かに; *advayasya*—絶対者の; *anahankṛteḥ*—偽の自我という物質的同一心がない; *tat-kṛtam*—主によってなされるすべて; *mati*—意識; *vaiṣamyam*—区別; *niravadyasya*—どのような執着心もない; *na*—決してない; *kvacit*—どの状態でも。

主は絶対人格主神であるため、全生命体の心のなか住み、だれにも等しく親切で、差別心という偽の自我を超越しておられる。ゆえに、主がすることに物質的な欠点はない。まったく安定した方なのである。

要旨解説

主は絶対的な方ですから、主と関係のないものはなにもありません。主はカイヴァリヤ (*kaivalya*)、すなわち主以外になにも存在しません。人も物もすべて主の力の表われですから主は自分の力をおして、その表わされたものと変わることなく遍在しています。太陽は、太陽光線そのものと、そして光線の全構成分子と同じです。同じように、主はさまざまな力をおしてあらゆる場所に存在しています。主はパラマートマー・超靈魂であり、すべての魂の心のなかに至高の案内者として住んでいますから、すでに全生命体にとっては御者でもあり良き相談者でもあります。ですから、主がアルジュナの御者としてふるまっても、その高貴な立場が変わるわけではありません。献愛奉仕の力だけが、主を御者や使者として表わしているのです。主は絶対的な精神魂そのものであり、物質的概念はまったくあてはまらない方ですから、主の活動に優劣の違いはありません。主は絶対人格主神ですから偽の自我などありませんし、自分とは異質なものと自分を同一視することもあります。自我という物質的概念は、主のうちでは同質なのです。ですから、主は純粋な献愛者の馬車の御者になっても自分を劣る存在とは感じません。愛情あふれる主から奉仕をしてもらうことほど、純粋な献愛者にとって栄光なことはありません。

第 2 2 節

तथाप्येकान्तभक्तेषु पश्य भूपानुकम्पितम् ।
यन्मेऽसूंस्त्यजतः साक्षात्कृष्णो दर्शनमागतः ॥ २२ ॥

タタハーピ エーカーンタ・バハクテージュ
tathāpy ekānta-bhakteṣu

パッシャ ブフーパーヌカンムピタンム
paśya bhūpānukampitam

ヤン メー スूंムス テヤジャタハ サークシャートウ
yan me 'sūms tyajataḥ sāksāt

クリシュノー ダルシャナンム アーガタハ
kṛṣṇo darśanam āgataḥ

tathāpi—それでも; *ekānta*—揺るぎない; *bhakteṣu*—献愛者たちに; *paśya*—ここを見る; *bhū-pa*—王よ; *anukampitam*—なんと思いやりのあることか; *yat*—～のために; *me*—私の; *asūn*—命; *tyajataḥ*—終わろうとしている; *sāksāt*—直接に; *kṛṣṇaḥ*—人格主神; *darśanam*—私の目に; *āgataḥ*—親切に来てくださった。

それでも、主はだれにも等しく親切である方なのに、生涯の幕を閉じようとしている私のもとに慈悲深くも来てくださった。これは、私が主に揺るぎない奉仕をしてきたからである。

要旨解説

至高主、絶対人格主神、シュリー・クリシュナはだれにも等しく接する方ですが、完全に主に身をゆだね、主だけを自分の保護者・主人と考えている不動の献愛者には、ひときわ好意を寄せます。至高主を保護者・友人・主人と思う揺るぎない信念をいただくのは、永遠な生活をしている人々にはあたりまえのことです。全能者の意志によって、生命体は、自分を完全な依存の立場に置いたときにもっとも幸福になるよう作られているのです。

その反対の考えをすれば必ず墮落していきます。物質界を好きなように支配できると誤解しているために、墮落する性癖を持っています。あらゆる問題の根源は、まちがった利己主義にあります。なにがあっても、私たちは主を求めなくてはなりません。

主クリシュナがビーシュマジーの臨終の床に姿を見せたのは、この人物が意志堅固な献愛者だったからです。アルジュナは、主クリシュナが母型のいところだったことから、ふたりは血縁関係にありましたが、ビーシュマはそうではありませんでした。ですから、主とビーシュマが惹かれたのは、魂の親密な関係によるものでした。しかし、親族としてのつながりは心のなごむ自然な関係であることから、主は、マハーラージャ・ナンダの子、ヤ

ショーダーの子、ラーダーラーニーを愛する人、などと呼ばれることに喜びを感じます。主との親密な血縁関係は、愛情奉仕を分かちあう別の形です。ビーシュマデーヴァはこの超越的な甘露をよく知っていたため、ナンダ・ナンダナとかヤショーダー・ナンダナとまったく同じように、主をヴィジャヤ・サケー、パールタ・サケーと呼びたいと思っていました。超越的な甘露にもとづく絆を築く一番の方法は、主が認める献愛者に近づくことです。主と直接結ばれたいと思っはなりません。私たちが正しい道に導いてくれる透明で資格のある媒体となる人物が必要なのです。

第23節

भक्त्यावेश्य मनो यस्मिन् वाचा यन्नाम कीर्तयन् ।
त्यजन् कलेवरं योगी मुच्यते कामकर्मभिः ॥ २३ ॥

バハクチャーヴェーッシャ マノー ヤスミン
bhaktyāveśya mano yasmin

ヴァーチャー ヤン・ナーマ キールタヤン
vācā yan-nāma kīrtayan

テャジャン カレーヴァランム ヨーギー
tyajan kalevaram yogī

ムッチャテー カーマ・カルマビヒ
mucyate kāma-karmabhiḥ

bhaktyā—一心に集中することで; *āveśya*—瞑想すること; *manaḥ*—心; *yasmin*—～である人のなかに; *vācā*—活動によって; *yat*—クリシュナ; *nāma*—聖なる名前; *kīrtayan*—唱えること; *tyajan*—終わらせること; *kalevaram*—この物質の肉体; *yogī*—献愛者; *mucyate*—解き放される; *kāma-karmabhiḥ*—果報的活動から。

全霊をこめて仕え、瞑想し、聖なる名前を唱える献愛者の心に人格主神は現われる。そして、肉体を終えようとするその献愛者を果報的活動の束縛から解き放つ。

要旨解説

ヨーガとは、心をいっさいの物事から遮断して1点に集中させることで、その境地に達した状態をサマーディ (*samādhi*) 「主への奉仕に没頭しきった状態」といいます。そして、心をそのように集中させる人物をヨーギー (*yogī*) といいます。主のヨーギーの献愛者は、心が9種類の献愛奉仕——聞くこと、唱えること、思いだすこと、崇拜すること、祈ること、自発的な召使いになること、命令を実行すること、友人関係を築くこと、自分の持つものすべてを捧げること——をとおして主に集中されるように、主のために一日中励みま

す。そのようなヨーガ、すなわち奉仕による主との交流を修練する人は主自身から認められるようになり、『バガヴァッド・ギーター』でも、サマーディという最高完成の境地に関連してそのことが説明されています。主は、数少ないそのような献愛者を「ヨーギーのなかのヨーギー」と呼んでいます。完璧なヨーギーは、主の神聖な恩寵によって主に完璧に意識を集中させることができます。そして肉体を終えるときに聖なる名前を唱え、主の内なる力に助けられて、物質生活や俗事とは無縁の永遠な惑星に瞬時に移されます。物質界に住む生命体は、果報的活動に応じて、3種類の苦しみを幾生涯にわたって堪え忍ばなくてはなりません。物質生活の原因は物質的望みにあります。主に仕えることで生命体にそなわっている本来の望みが失われるわけではありません。献愛奉仕という本義のために使われ、精神界に帰る望みがさらに強くなります。將軍ビーシュマデーヴァはバクティ・ヨーガについて言及し、主に見守られてこの世を去るという幸運を授かりました。そしてつづく節では、どうか臨終のときまでかたわらにいてください、と主に語りかけています。

第24節

स देवदेवो भगवान् प्रतीक्षतां
कलेवरं यावदिदं हिनोम्यहम् ।
प्रसन्नहासारुणलोचनोल्लस-
न्मुखाम्बुजो ध्यानपथश्चतुर्भुजः ॥ २४ ॥

サ デーヴァ・デーヴォー バハガヴァーン プラティークシャターンム
sa deva-devo bhagavān pratīkṣatām

カレーヴァランム ヤーヴァドゥ イダンム ヒノミー アハンム
kalevaram yāvad idam hinomy aham

プラサンナ・ハーサールナ・ローチャノールラサン・
prasanna-hāsāruṇa-locanollasan-

ムカハーンムブジョー デャーナ・パタハシュ チャトウル・ブジャハ
mukhāmbujo dhyāna-pathaś catur-bhujah

saḥ—主; deva-devaḥ—神々のなかの至高主; bhagavān—人格主神; pratīkṣatām—どうかお待ちください; kalevaram—肉体; yāvat—するかぎり; idam—これ(物質の肉体); hinomi—終えるように; aham—私; prasanna—朗らかな; hāsa—ほほえみ; aruṇa-locana—朝日のように赤い目; ullasat—美しく飾られて; mukha-ambujah—主のお顔という蓮華の花; dhyāna-pathaḥ—私の瞑想の道で; catur-bhujah—4本腕の姿のナーラーヤナ(ビーシュマデーヴァが崇拝する神)。

4本の腕を持つ主よ。あなた様の目は朝日のように赤く輝いています。そして、その美しい目で飾られた蓮華のお顔でほほえんでおられます。どうか、私がこの肉体を終えるときまで、お待ちください。

要旨解説

ビーシュマデーヴァには、主クリシュナが根源のナーラーヤナであることを、そして崇拜していた神像が4本腕のナーラーヤナが主クリシュナの完全拡張体であることを知っていました。この祈りは、主シュリー・クリシュナに4本腕のナーラーヤナの姿を現わしてほしい、というビーシュマデーヴァの願いです。ヴァイシュナヴァはいつでも控えめに行動します。ビーシュマデーヴァが肉体を去ったあとヴァイクンタ・ダーマ (Vaikuṅṭha-dhāma) に行くことはまちがいありませんが、謙虚なヴァイシュナヴァとして、主の美しい顔を見たいと思いました。現在の肉体を去ったあと、もう主を見る立場にはいられないのでは、と考えたからです。主は純粋な献愛者が主の住居に入ることを保証していますが、ヴァイシュナヴァはそれで横柄になることはありません。ビーシュマデーヴァは「私がこの体を終えないかぎり」と言いました。これは、この偉大な将軍がみずからの意志で肉体を去ることを意味しています。自然の法則に縛られる人物ではなかったのです。比類のない精神的力を持っていたために、望みどおりに体にとどまることができました。父親からその恩恵を授かっていたのです。ビーシュマデーヴァは、主の4本腕の姿をまぢかに見つめることで主に意識を集中させ、法悦境にいたいと考えたのでした。そして心は主への思いによって清められ、そうすれば自分がどこへ行ってもかまいません。純粋な献愛者は、神の国に帰ることを熱望しているわけではありません。すべてを主の崇高な意志にまかせているのです。地獄に落ちるのが主の望みであれば、それで本望と考えます。純粋な献愛者のただひとの望みは、なにがあるかと、絶えず主の蓮華の御足に専心することです。ビーシュマデーヴァの思いはただひとつ——心を主に没頭させ、その思いのなかで他界していく。それこそが、純粋な献愛者の至上の願いです。

第25節

सूत उवाच

युधिष्ठिरस्तदाकर्ण्य शयानं शरपञ्चरे ।

अपृच्छद्विविधान्धर्मानृषीणां चानुशृण्वताम् ॥ २५ ॥

スータ ウヴァーチャ

sūta uvāca

ユディシュティラス タドウ アーカルニヤ

yudhiṣṭhiras tad ākarṇya

シャヤーナンム シャラ・パンジャレー

śayānam śara-pañjare

アプリッチャドゥ ヴィヴィダハーン ダハルマーン

apṛcchad vividhān dharmān

リシーナーンム チャーヌシュリンヴァターンム

ṛṣiṇām cānuśṛvatām

sūtaḥ uvāca—シュリー・スータ・ゴースヴァーミーが言った; *yudhiṣṭhiraḥ*—ユディシュティラ王; *tat*—それ; *ākarma*—聞いている; *śayānam*—横たわっている; *śara-pañjare*—矢の寝台の上に; *apṛcchat*—尋ねた; *vividhān*—さまざまな; *dharmān*—義務; *ṛṣiṇām*—リシたちの; *ca*—そして; *anuśṛvatām*—聞いたあと。

スータ・ゴースヴァーミーが言った。「マハーラージャ・ユディシュティラは、ビーシュマデーヴァの心にひびく言葉を聞いたあと、いならぶ偉大なリシたちのまえで、さまざまな宗教義務の原則について尋ねた」

要旨解説

ビーシュマデーヴァはマハーラージャ・ユディシュティラに、心に訴えかけるような口調で語りながら、もうすぐ自分が他界することを確信させました。そしてユディシュティラ王も、宗教原則について祖父に尋ねるよう主シュリー・クリシュナから心を通じて伝えられました。主シュリー・クリシュナがそのようにマハーラージャ・ユディシュティラを励ましたのは、そうすることでビーシュマデーヴァのような主の献愛者は、ふつうの人間のように見えても、じつは並みいる偉大な聖者よりも、否、ヴァーサデーヴァよりもはるかに優れた人物であることであることをしめしたかったのです。もうひとつ挙げられるのは、ビーシュマデーヴァは矢の寝台で他界しようとしていただけではなく、身動きひとつできない悲惨な状態にあった、ということです。そのようなときに質問などすべきではないのですが、主シュリー・クリシュナは、精神的啓蒙の力を持つ純粋な献愛者はつねに体や心が健全であり、だからこそどんな状況でも、人生の正しい道を理路整然と説明できることを証明してもらいたいと考えていました。ビーシュマデーヴァよりも博学と思われる人格者たちもいたのですが、ユディシュティラ王は思い悩んでいたことをビーシュマデーヴァに解決したいと思っていました。これは、輪宝を手にした偉大な主シュリー・クリシュナが、献愛者の栄光を確立させたいと望んでいたからこそその配慮でした。父親は、息子が自分よりも有名になってほしいと願っています。主は高らかに宣言しています、主の献愛者を崇拜するほうが主を崇拜することよりも価値があることを。

第26節

पुरुषस्वभावविहितान् यथावर्णं यथाश्रमम् ।
वैराग्यरागोपाधिभ्यामाम्नातोभयलक्षणान् ॥ २६ ॥

プルシャ・スヴァ・バハーヴァ・ヴィヒターン
puruṣa-sva-bhāva-vihitān

ヤタハー・ヴァルナンム ヤタハーシュラマンム
yathā-varṇaṁ yathāśramam

ヴァイラーギヤ・ラーゴパーディビヤーンム
vairāgya-rāgopādhibhyām

アムナートーバハヤ・ラクシャナーン
āmnāto bhaya-lakṣaṇān

puruṣa—人類; *sva-bhāva*—自分で得た質によって; *vihitān*—定められた; *yathā*—～に応じた; *varṇam*—階級の分類; *yathā*—～に応じて; *śramam*—生活階級; *vairāgya*—無執着; *rāga*—執着; *opādhibhyām*—そのような呼称から; *āmnāta*—系統的に; *ubhaya*—両方; *lakṣaṇān*—兆候。

マハーラージャ・ユディシュティラに尋ねられたビーシュマデーヴァは、まず、個人の性質にあった社会的階級と精神的階級に関する分類をすべて定義した。つぎに、各自が持っている執着・無執着の心境に応じて定められた放棄と楽しみの資質について説明した。

要旨解説

主が『バガヴァッド・ギーター』（第4章・第13節）で説明しているように、4つの社会階級と4つの生活階級は個人の超越的気質を高めるためにあり、精神的本質を徐々に悟り、その悟りによって束縛された、あるいは条件づけられた生活から自由になることができます。ほとんどのプラーナが同じ観点からその主題について述べており、また『マハーバーラタ』の「シャーンティ・パルヴァ」第6章で、ビーシュマデーヴァによってさらに詳しく説明されています。

ヴァルナーシュラナ・ダルマ (*varṇāśrama-dharma*) は、人としての生涯を不都合なく終わらせられるよう文化的人類のために定められています。自己の悟りは、ただ食べ、眠り、恐れ、子孫を作ることだけに明け暮れている下等な動物にはできません。ビーシュマデーヴァは9つの質を人類に教えています。(1)怒らないこと、(2)嘘をつかないこと、(3)財産を等しく分けあたえること、(4)許すこと、(5)結婚した妻だけと子をもうけること、(6)心の純粹さと体の衛生につとめること、(7)だれにも敵意をいだかないこと、(8)質素であること、(9)召使いや部下を適切に養うこと。この基本的な質がなければ文化人とは呼べません。さらに、ブラーフマナ（知識階級者）、管理階級者、商業従事者、労働階級者は、ヴ

ヴェーダ経典が述べる各自の特質をそなえていなくてはなりません。知識階級者なら感覚の抑制は不可欠です。これは道徳律にもとづいています。正式な妻との性関係さえも抑制されるべきで、そのことで必然的に秩序ある家族計画が保たれます。知性のある人はヴェーダが教える生活に従うべきであり、さもなければそのすばらしい特質を誤用してることになります。これはヴェーダ経典、とくに『シュリーマド・バーガヴァタム』と『バガヴァッド・ギーター』を真剣に学ぶべきである、ということです。ヴェーダ知識を学ぶには、献愛奉仕を完全に実践している人に従わなくてはなりません。シャーストラで禁じられていることはぜったいにしてはなりません。飲酒や喫煙をしている人が教師になれるわけがありません。現代の教育制度では、教師の学術的気質が道徳面を無視して決められています。その結果、さまざまな面で知性がまちがって使われるようになっていきます。

クシャトリヤ・管理階級者は、とくに慈善をすること、そしてどのような状況でも慈善を受けてはならないと助言されています。現代の管理階級者は政治的行事に対して市民に寄金を要求しているのに、国として市民に慈善をすることはありません。これはシャーストラの教えに反しています。管理階級者はシャーストラに精通しているべきですが、また職業教師になってはいけません。行政執行者が非暴力主義に従うのはまちがいであり、非暴力主義者のまねをすれば地獄に落ちるばかりです。アルジュナはクルクシェートラの戦場で暴力を使わない臆病者になろうとしていましたが、主クリシュナに厳しく罰せられました。非暴力などという文化を公然と口にしたアルジュナを非文化人と咎めたのです。行政に携わる者なら十分に軍事教育を受けなくてはなりません。大量の票を得ただけの臆病者は大統領の席に座るべきではありません。昔の君主はすべて騎士道精神に徹した軍人でした。君主制は、君主が王の義務を果たすために、規則的に訓練を受けて維持されます。戦いともなれば、王や大統領は、無傷で我が家に帰ることがあってはなりません。現代の王は陣頭に立つわけではありません。安全な執務室から戦力強化を命じるのは巧みでも、その目的は間違った国家の名声を高めることにあります。行政官階級が商人や労働者の仕事をするようでは、国の政治は機能しません。

ヴァイシャ・商業階級者は、とくに牛を守るよう助言されています。牛を守れば、チーズやバターのような乳製品の生産量が高まります。農業と食料流通は、ヴェーダ知識の教育にしたがった商業階級の主要な義務であり、ヴァイシャは慈善を施すことを学ばなくてはなりません。クシャトリヤに市民を守る責任があるように、ヴァイシャには動物を守る責任があります。動物はぜったいに殺してはなりません。動物の屠殺は野蛮人の社会でおこなわれることです。人間には、農産物、くだもの、ミルクが十分かつ最適な食糧です。人類は、動物を守ることにもっと注意を傾けるべきです。労働者が工場で働くのは、労働者の生産能力を正しく使っていないことになります。工場がどれほどあっても、人間の必需品、つまり米、小麦、穀物、ミルク、くだもの、野菜を作りだすことはできません。機械やその道具を生産しても、利益を得る側の不健全な生活を助長させるだけで、無数の人々

が飢え、社会は不安定になっていきます。

シュードラ階級は知性にめぐまれていない人たちを指し、奔放な生活は戒められています。シュードラより上位3つの社会階級のために誠実な仕事をする人たちです。上の階級のために働くことで、快適な生活に必要なものはすべて供給されます。とくに「貯金をしないこと」が助言されています。シュードラが財産を貯めると、酒、女性、賭博といった罪なことに使われがちです。酒、女性、賭博は、人々をシュードラ以下の気質に墮落させます。上位の階級の人々は、責任をもってシュードラ階級の人々を養わなくてはならず、中古の衣服を用意してあげなくてはなりません。シュードラは、自分の主人が老齢や病弱になったときにその主人を見捨ててはなりませんし、主人も自分の召使いが全面的に満足するよう養わなくてはなりません。どのような儀式を執行するにしても、そのまえにまずシュードラは十分な食料と衣服で満たされていなくてはなりません。現代では、多額のお金を費やしてさまざまな行事がおこなわれていますが、哀れな労働者たちには十分な食糧や施しや衣服などが与えられていません。このように、労働者たちは満たされていないからこそ、騒ぎを起こしたりするのです。

ヴァルナ (varṇa) はさまざまな職業の分類であり、アーシュラマ・ダルマ (āśrama-dharma) は、自己を悟る精神的段階にもとづく区分です。それぞれが相互関係を持ち、1つの区分が全体に依存しています。アーシュラマ・ダルマの主要目的は、知識と無執着に目覚めさせることにあります。ブラフマチャーリー・アーシュラマでは将来のために訓練をうけます。このアーシュラマでは、物質界は生命体のほんとうのふるさとはない、ということが教えられます。物質界にいる条件づけられた魂は物質という牢獄に縛られているため、自己の悟りこそが人生の究極目標になります。アーシュラマ・ダルマ全体は、私たちが無執着になれるよう設計されています。無執着の生活を貫くことができないは、無執着の心構えで家族生活に入ることが許されます。ですから、無執着の心境に到達した人は、すぐに4番目の放棄階級を受け入れ、財産に頓着せず、施しだけを受けて暮らし、究極のさとりを目指して体と心を維持しなくてはなりません。世帯者生活は、執着心を持つ人のためにあり、ヴァーナプラスタとサンニャーサ階級は、物質生活に無執着になった人々のためにあります。ブラフマチャーリー・アーシュラマはとくに、執着・無執着両方の人を育てるために用意されています。

第27節

दानधर्मान् राजधर्मान् मोक्षधर्मान् विभागशः ।
स्त्रीधर्मान् भगवद्धर्मान् समाप्तव्यासयोगतः ॥ २७ ॥

ダーナ・ダハルマーン ラージャ・ダハルマーン
dāna-dharmān rāja-dharmān

モークシャ・ダルマーン ヴィバハーガシャハ
mokṣa-dharmān vibhāgaśaḥ

ストウリー・ダルマーン バハガヴァドゥ・ダルマーン
strī-dharmān bhagavad-dharmān

サマーサ・ヴァーサ・ヨーガタハ
samāsa-vyāsa-yogataḥ

dāna-dharmān—慈善行為; *rāja-dharmān*—王の具体的な活動; *mokṣa-dharmān*—解放のための活動; *vibhāgaśaḥ*—区分によって; *strī-dharmān*—女性の義務; *bhagavat-dharmān*—献愛者の活動; *samāsa*—普通; *vyāsa*—明白に; *yogataḥ*—~によって。

次に、慈善活動、王の統治活動、解脱のための活動について区分して説明した。さらに、女性と献愛者の義務について、かんたんかつ広範囲に述べた。

要旨解説

施しをすることは世帯者の主要な仕事のひとつであり、苦勞して稼いだお金の50パーセントを出すべきです。ブラフマチャーリー・学習者は儀式を執行し、世帯者は施しをし、放棄階級にある人は改悛と苦行に励まなくてはなりません。それが、自己の悟りの生活に用意された全アーシュラマの役割です。ブラフマチャーリーの生活をする人は十分な指導をうけるべきであり、その指導の結果、世界は至高主・人格主神の所有物であることが理解できるようになります。理解できれば、だれであっても、なにひとつ自分のものであると主張できないはずです。ですから、世帯者の生活はいわば許可された性生活であり、主に仕えながら施しをしなくてはなりません。だれの力であろうと、その力は主という力の源から作りだされている、あるいは主から拝借しているものです。ですから、そのような力の結果としての行動は、主への超越的な愛情奉仕という形で主に与えられなくてはなりません。川が雲という形で水を吸いあげ、ふたたび海に流れこむように、私たちの力は、至高の源、主の力から借りているのですから、それは主にもどすべきものです。それが完全な力の使い方です。ですから主は『バガヴァッド・ギーター』（第9章・第27節）で、することをすべて、おこなう苦行をすべて、犠牲としてするものをすべて、食べるものをすべて、慈善として施すものをすべて主に捧げなくてはならない、と説いています。それが拝借している力の正しい使い方です。自分の力がそのように使われれば、その力には物質的な魅力という穢れがなくなるため、私たちは主への奉仕という根源かつ本来の自然な生活ができるようになります。

ラージャ・ダルマ (*Rāja-dharma*) は偉大な科学であり、政治中心の現代の外交とは違います。王は、税金を集めるだけの人間ではなく、寛大な人間になるよう正しく訓練されていました。国民の繁栄だけを考えてさまざまな儀式をするよう訓練を受けていたのです。

解脱の境地に到達できるようプラジャー (prajā) 「国民」たちを導くことが、王の大きな義務でした。父親、精神指導者、王は、自分に従う人々を誕生・死・病気・老年からの究極的な解脱の道に導く責任を果たさなくてはなりません。このような主要な義務が正しく遂行されるのであれば「人民の、人民による政府」は必要ではありません。現代では、巧みに操作された投票の力で一般大衆自信が管理者階級に収まっていますが、王としての主要な義務を果たす訓練を受けたわけではありませんし、またそれはだれもができることでもありません。このような状況のなかで、訓練を受けていない行政者たちが、国民たちの幸福のため、と称して混乱を作りだしています。さらに、このような悪徳政治家や泥棒まがいの集団になり、無益な政治のために増税を繰り返しています。正しい質をそなえたブラーフマナは、王が『マヌ・サムヒター』やパラージャラが著した『ダルマ・シャストラ』のような経典に沿った正しい国政ができるよう指導する立場にあります。そのような王は一般市民の理想像であり、敬虔で信仰心が篤く、勇敢で寛大な王に国民が従うのはあたりまえのことです。正しい王は、臣下を食物にして生きるような怠惰で感覚的な人間ではなく、泥棒や盗賊を成敗することではつねに目を光らせています。敬虔な王は、的はずれのアヒムサー（非暴力）と称して犯罪人に情けをかけることはありません。泥棒や盗賊団には手本となるような厳罰を科して、組織的な犯罪を未然に防がなくてはなりません。いまでは盗賊集団が管理者側に立っており、これは本来あるべき姿ではありません。

税金の徴収はいたってかんたんで、強制的な取り立ても強奪もありませんでした。王には、国民が得た利益の4分の1、つまり所有財産の4分の1を要求する権利があったということです。当時は、敬虔な王と宗教上の調和の力で、穀物、くだもの、花、絹、綿、ミルク、宝石、鉱物などの自然の富が豊富に得られ、物質的にめぐまれていない人などいませんでしたから、だれも財産を手放すことを惜しみませんでした。市民は豊かな農耕や酪農を営み、穀物やくだものやミルクなどをたくさん備蓄しており、石鹸、化粧品、映画、バーといった不健全ものは必要ありませんでした。

王には、蓄えられた力が適切に使われているかを見守る義務がありました。私たち人間のエネルギーは、動物じみたことではなく、自己を悟るために使われなくてはなりません。政府はとくにこの目的を満たすために組織されていました。ですから、王は選挙などに頼らずに適切な大臣を選ぶ必要がありました。大臣、軍司令官、また一般兵士でさえ個人の資質にもとづいて選ばれ、王は適材適所の視点から正しく監督しなくてはなりません。とくに、精神的知識を理解するためにすべてを捧げた人々・タパスヴィー (tapasvī) が軽んじられることのないよう心がけていました。純粹無垢な献愛者が冒瀆されることを人格主神はけって許さないことをよく知っていたのです。そのようなタパスヴィーは強盗や盗賊でさえ信頼していた指導者でした。悪人たちでさえタパスヴィーの命令に背かなかったということです。王は、国内にいる文盲、身寄りのない人々、夫を失った女性たちを丁重に守っていました。国防政策は、敵の攻撃を受けるまえに完備されていました。税

制は簡単明瞭で、浪費のためではなく、蓄えられた資金を強化させるためにありました。兵士は全国から集められ、特別な義務遂行のために訓練を受けていました。

解脱については、欲情、怒り、不法な望み、貪欲、当惑といった要因を征服しなければ達成できません。怒りを克服するには、許す心を育む必要があります。不法な望みを捨てるには、計画をたてないことです。精神的文化を高めれば眠りを克服できます。忍耐心さえあれば、望みや貪欲を征服することができます。さまざまな病気による障害は、規則正しい食事で避けることができます。自己を抑制すれば悪い望みを持たなくなり、お金は望ましくなくつきあいを避ければ貯めることができます。ヨーガを修練して飢えを抑制し、世俗への執着はこの世の無常を知れば避けられます。めまいは立ち上がることで抑えられ、まちがった議論は事実を確認すれば克服できます。おしゃべりは厳粛さと寡黙さで避けることができ、勇敢さを身につければ恐怖心が克服できます。完璧な知識は自己修養によって得られます。だれであっても、解脱の境地に辿りつくために、欲情、貪欲、怒り、妄想などを克服しなくてはなりません。

女性は、男性にとって創造力の源泉とされています。つまり、女性は男性よりも力があるということです。かの強大なジュリアス・シーザーはクレオパトラに支配されていました。それほど力のある男性でさえ、恥じらいによって支配されるのです。ですから、女性には恥じらいが大切です。ひとたびこの支配の弁が開くと、女性は姦通によって社会を混乱に陥れます。姦通は、世界を混乱させるヴァルナ・シャンカラ (*varṇa-saṅkara*) という不必要な子どもたちを作りだします。

ビーシュマデーヴァが最後に教えたのは、主を喜ばせる方法です。だれもが主の永遠の召使いですが、この本質を忘れると物質的生活に巻きこまれます。主を喜ばせるかんたんな方法（とくに世帯者にとって）は、自宅に主の神像を据えつけることです。神像を中心に生活することで、毎日の決まった仕事を着実にこなすことができるようになります。自宅で神像を崇拜し、献愛者に仕え、『シュリーマド・バーガヴァタム』を聞き、聖地に住み、主の聖なる名前を唱えることはどれも、大金を使わずに主を喜ばせる方法です。このような話が祖父から孫へ説かれたのでした。

第28節

धर्मार्थकाममोक्षांश्च सहोपायान् यथा मुने ।
नानाख्यानेतिहासेषु वर्णयामास तत्त्ववित् ॥ २८ ॥

ダハルマールタハ・カーマ・モークシャーンムシュ チャ
dharmārtha-kāma-mokṣāṁś ca

サホーパーヤーン ヤタハー ムネー
sahopāyān yathā mune

ナーナーキヤーネーティハーセーシュ
nānākhyānetihāseṣu

ヴァルナヤーンム アーサ タットウヴァヴィトウ
varṇayām āsa tattvavit

dharmā—職務上の義務; artha—経済発展; kāma—望みの実現; mokṣān—究極の解脱; ca—そして; saha—〜と共に; upāyān—方法; yathā—ありのままに; mune—おお聖者よ; nānā—さまざまな; ākhyāna—歴史の物語を列挙して; itihāseṣu—歴史のなかの; varṇayām āsa—述べた; tattva-vit—真実を知る者。

つぎに、さまざまな地位と社会階級の義務について、史実を挙げて説明した。ビーシュマ自身が真理に精通する人物だったからである。

要旨解説

プラーナ、『マハーバーラタ』、『ラーマーヤナ』のようなヴェーダ経典で述べられている出来事は、年代順ではないものの、過去に実際に起こったことです。歴史的事実は、一般人には有益なことであるため、年代を考慮することなく列挙されています。さらに、それらはさまざまな惑星で、いいえ、さまざまな宇宙で起こったことですから、その物語のときに次元を超えて説明されています。私たちの理解力を超えている史実はあるものの、私たちはとりわけ有益な出来事に着目しています。ビーシュマデーヴァは、マハーラージャ・ユディシュティラのさまざまな質問に答えて、そのような物語を聞かせたのでした。

第29節

धर्मं प्रवदतस्तस्य स कालः प्रत्युपस्थितः ।
यो योगिनश्छन्दमृत्योर्वाञ्छितस्तूत्तरायणः ॥ २९ ॥

ダハルマンム プラヴァダタス タッシャ
dharmam pravadataṣ tasya

サ カーラハ プラテュバスティタハ
sa kālaḥ pratyupasthitaḥ

ヨー ヨーギナシュ チャンダ・ムリテョール
yo yoginaś chanda-mṛtyor

ヴァーンチタス トウーッタラーヤナハ
vāñchitaṣ tūttarāyaṇaḥ

dharmam—職務上の義務; pravadataḥ—説明しているときに; tasya—彼の; saḥ—その; kālaḥ—時; pratyupasthitaḥ—正確に現われた; yaḥ—それは〜である; yoginaḥ—神秘家に

とって; *chanda-mṛtyoḥ*—自分で選んだ時に従って死のうとする者の; *vāñchitaḥ*—〜に望まれている; *tu*—しかし; *uttarāyaṇaḥ*—太陽が北側の地平線に入る周期。

ビーシュマデーヴァが職務上の義務について述べているとき、太陽が北半球内に入った。これは、みずからの意志で死のうとする神秘家が望んでいる周期である。

要旨解説

完璧なヨーギー・神秘家は、自分の意思で適切な時間帯を選んで肉体を去ることができ、そして望むとおりの惑星に入ることができます。『バガヴァッド・ギーター』（第8章・第24節）では、自分の興味を至高主の興味と完全に一致させている自己を悟った魂は、太陽が北側の地平線にあり、火の神が輝いている時期に肉体を離れることができ、そして崇高な世界に入ることができる、とされています。また他のヴェーダ経典では、この時期は肉体を終えるに吉兆な時間帯であり、ヨーガをきわめた神秘家はそのときに他界する、ともあります。ヨーガの完成とは、望みどおりに物質の体を出ることのできるそのような超心理状態に達することをいいます。ヨーギーは、物質的な乗り物を使わずに目指す惑星に入ることができます。瞬時に最高位の天体系に到達できるのですが、これは物質主義者にできることではありません。最高位の天体系に到達するには、毎時何百万キロの速度で飛んでも何百万年もかかります。現代人にとっては異次元の科学であり、ビーシュマデーヴァはその科学に精通していました。肉体を出る好機を待っていたのであり、その絶好の機会が高潔な孫たちに教えをさずけているときに訪れました。こうして、高貴な主シュリー・クリシュナ、敬虔なパーンダヴァ兄弟、バガヴァーン・ヴァーサたちのいるまえて肉体を去る準備をしたのです。

第30節

तदोपसंहृत्य गिरः सहस्रणी-
विमुक्तस्रां मन आदिपूरुषे ।
कृष्णे लसत्पीतपटे चतुर्भुजे
पुरः स्थितेऽमीलितदुग्धधारयत् ॥ ३० ॥

タドーパサンムフリテャ ギラハ サハスラニール
tadopasamhṛtya giraḥ sahasraṇīr

ヴィムクタ・サンガンム マナ アーディ・プールシェー
vimukta-saṅgam mana ādi-pūruṣe

クリシュネー ラサトウ・ピータ・パテー チャトウル・ブフジェー
kṛṣṇe lasat-pīta-paṭe catur-bhuje

ブラハ スティター ミーリタ・ドゥリグ ヴァダハーラヤトウ
purah sthite 'milita-dṛg vyadhārayat

tadā—そのとき; *upasamhṛtya*—やめること; *giraḥ*—話; *sahasraṇiḥ*—ビーシュマデーヴァ (何千もの科学や芸術に長けた人物); *vimukta-saṅgam*—いっさいから完全に自由になって; *manaḥ*—心; *ādi-pūruṣe*—人格主神に; *kṛṣṇe*—クリシュナに; *lasat-pīta-pāte*—黄色の衣服で飾られた; *catur-bhuje*—4本腕の根源のナーラーヤナに; *purah*—その直前; *sthite*—立っている; *amilita*—広げられた; *dṛk*—視野; *vyadhārayat*—固定させた。

無数の意味を含むさまざまな教えを説き、幾千もの戦争を戦い抜き、数え切れない人々を守った人物ビーシュマデーヴァが、そのとき、話を終えた。そして、いっさいの束縛から解放され、いっさいの思いを捨て、シュリー・クリシュナという輝く黄色の衣服で飾られ、4本腕の姿で立つ根源の人格主神に、大きく見開いた目を固定させた。

要旨解説

ビーシュマデーヴァは、人間生活をまっとうする使命を、肉体を去る瞬間に誉れ高い模範でしめました。死に直面している人が惹きつけられる物事は、来世からふたたび始まります。ですから、その瞬間に至高主シュリー・クリシュナに思いを没頭させているのであれば、まちがいなく主のもとに帰っていきます。これは『バガヴァッド・ギーター』(第8章・第5-15節)でも確認されていることです。

第5節 そして、だれであろうと、臨終の時にわたしだけを思いながら肉体を終える者は、すぐにわたしの世界に到達する。このことにいっさいの疑いはない。

第6節 肉体を終えるときに思うものがなんであっても、その状態はまちがいなく達成される。

第7節 ゆえにアルジュナよ。いつもわたしをクリシュナの姿として思い、同時に、戦闘という自分に定められた義務をまっとうせよ。行動をわたしに捧げ、心と知性をわたしに固定させることで、まちがいなくわたしに辿り着く。

第8節 パールタ (アルジュナ) よ。至高人格主神を瞑想し、心を絶えずわたしへの思いに没頭させ、その道から逸れない者は、必ずわたしに辿りつく。

第9節 至高の人物を、すべてを知る者として、最古の人物として、支配者として、もっとも小さなものよりさらに小さな存在として、万物を維持する者として、あらゆる物質的概念を超えた者として、人智を超えた者として、つねに人物でありつづける者として瞑想しなくてはならない。主は太陽のように光りかがやき、超越的な方であるゆえに、物質自然を超えた方である。

第10節 死ぬときに、生気を眉間に固定させ、揺るぎない愛情をこめて至高主を思う者は、

かならず至高人格主神に到達する。

第11節 ヴェーダに精通し、オームカーラ (omkāra) を唱え、放棄階級にある偉大な聖者たちはブラフマンに入る。そのような完成の境地を目指す者たちは、独身生活を修練する。解脱の境地を達成できるこの方法についてこれから説明する。

第12節 ヨーガを修練する境地とは、感覚にかかわる行動をいっさい断つということである。感覚の扉をすべて閉ざし、心を心臓に、そして生気を頭の頂点に固定させることで、ヨーガのなかにみずからを確立させることができる。

第13節 このヨーガ修練法にみずからを立脚させ、言葉の絶妙な組み合わせである神聖な音・オームを唱えたあとに、至高人格主神のことを考えながら肉体を終える者は、かならず精神的惑星に入ることができる。

第14節 プリターの子よ。意識を逸らさずにわたしを思いつづける者は、わたしを難なく手にいれることができる。献愛奉仕に専念しているからである。

第15節 献愛奉仕に励む偉大な魂たちは、わたしのもとに来たあと、苦しみに満ちたこのはかない世界には決してもどってこない。最高の完成境地に到達したからである。

シュリー・ビーシュマデーヴァは、自分の意思で肉体を終えるという完成を達成し、自分瞑想の対象である主クリシュナを、そして死ぬときにその場にいた主クリシュナを見るという幸運にめぐまれました。だからこそ視線を主に集中させたのです。主シュリー・クリシュナに自然にあふれでる愛情を感じていたビーシュマデーヴァは、長いあいだ主に会いたいと考えていました。純粋な献愛者でしたから、ヨーガの込みいった原則にはほとんどかわりがありませんでした。かんたんなバクティ・ヨーガだけで完成の境地に到達できるのです。ビーシュマデーヴァの燃えるような願いは、もっとも愛しい方・主クリシュナという人物を見ることでしたが、その願いが、主の恩寵によって、最後の息を引き取るときに主を見るという好機となって叶えられたのでした。

第31節

विशुद्धया धारणया हताशुभ-
स्तदीक्षयैवाशु गतायुधश्रमः ।
निवृत्तसर्वेन्द्रियवृत्तिविभ्रम-
स्तुष्टाव जन्यं विमृजञ्जनार्दनम् ॥ ३१ ॥

ヴィシュツダハヤー ダハラナヤー ハターシュバハス
viśuddhayā dhāraṇayā hatāśubhas

タドゥ・イークシャヤイヴァーシュ ガター・ユダハ・シュラマハ
tad-ikṣayaivāśu gatā-yudha-śramaḥ

ニヴリッタ・サルヴェーンドウリヤ・ヴリッティ・ヴィブフラマス
nivṛtta-sarvendriya-vṛtti-vibhramas

トウシュターヴァ ジャニヤンム ヴィスリジャン ジャナールダナンム
tuṣṭāva janyam visṛjañ janārdanam

viśuddhayā—浄化されて; *dhāraṇayā*—瞑想; *hata-aśubhaḥ*—物質存在の不吉な質を最小化させた者; *tat*—主に; *ikṣayā*—～を見つめながら; *eva*—ただ; *āśu*—すぐに; *gatā*—行ってしまっ; *yudha*—矢から; *śramaḥ*—疲労; *nivṛtta*—終えて; *sarva*—すべての; *indriya*—感覚; *vṛtti*—活動; *vibhramaḥ*—広く従事して; *tuṣṭāva*—祈った; *janyam*—物質の肉体; *visṛjan*—終わるときに; *janārdanam*—生命体の支配者に向かって。

ビーシュマデーヴァは、一点の曇りもない瞑想で主シュリー・クリシュナを見つめながら、不吉な物事いっさいから解放され、突き刺さった矢による激痛も消えていった。こうして、感覚の動きはすべて停止し、物質の体を終えるそのとき、全生命体の支配者にむかって崇高な祈りを捧げた。

要旨解説

物質の体は物質勢力から与えられたものであり、的確に言えば幻想です。その体と自分を同じものと思ってしまうのは、主との永遠な絆を忘れた結果です。純粹な献愛者であるビーシュマデーヴァの場合、この幻想は主がその場にきた時点ですぐに取りのぞかれました。主クリシュナは太陽であり、その幻想・外なる力は暗闇です。太陽が輝くところに無知はいつづけることができません。ですから、主クリシュナが到着したそのとき物質的穢れは完全に消えさり、ビーシュマデーヴァは物体にそなわる不純な感覚の活動を停止させ、超越的境地に置かれました。魂は本来純粹で、感覚も純粹です。感覚は物質の穢れのために不完全で不純な機能をはたすようになります。至高で純粹な方・主クリシュナとの絆をよみがえらせることで、感覚はふたたびその穢れから解放されます。ビーシュマデーヴァは、主がその場にいたことから、肉体を離れるまえにその超越的境地に入っていました。主は全生命体の支配者であり、また恩人です。それがヴェーダの見解です。主はすべての永遠の生命体のなかに住む至高の永遠性・生命体です（外注1）。そして主だけが、生命体に必要なものすべてを供給することができます。こうして主は、次の節のように祈った偉大な献愛者シュリー・ビーシュマデーヴァの超越的な望みを叶えたのでした。

注意1

ニテヨー ニチャーナーナム チェータナシュ チェータナーナーナム
nityo nityānām cetanaś cetanānām

エーコー バフナーナム ヨー ヴィダダハーティ カーマーン
eko bahūnām yo vidadhāti kāmān

『カタ・ウパニシャッド』

第32節

श्रीभीष्म उवाच

इति मतिरुपकल्पिता वितृष्णा
भगवति सात्वतपुरावे विभूमि ।
स्वसुखमुपगते क्वचिद्विहर्त
प्रकृतिमुपेयुषि यद्भवप्रवाहः ॥ ३२ ॥

シュリー・ビヘーシュマ ウヴァーチャ
śrī-bhīṣma uvāca

イティ マティル ウパカルピター ヴितृウリシュナー
iti matir upakalpītā vitṛṣṇā

バハガヴァティ サートウヴァタ・プンガヴェー ヴィブフームニ
bhagavati sātvata-puṅgave vibhūmni

スヴァ・スカハナム ウパガター クヴァチドゥ ヴィハルトウム
sva-sukham upagate kvacid vihartum

プラクリティナム ウペーユシ ヤドゥ・バハヴァ・プラヴァーハ
prakṛtim upeyuṣi yad-bhava-pravāhaḥ

śrī-bhīṣmaḥ uvāca—シュリー・ビーシュマデーヴァが言った; *iti*—このように; *matih*—思考、感情、望み; *upakalpītā*—使って; *vitṛṣṇā*—すべての感覚の望みから自由になって; *bhagavati*—人格主神に; *sātvata-puṅgave*—献愛者の指導者に; *vibhūmni*—その偉大な方に; *sva-sukham*—自己満足; *upagate*—それを達成した主に; *kvacid*—時々; *vihartum*—超越的喜びから; *prakṛtim*—物質界に; *upeyuṣi*—それを受け入れる; *yad-bhava*—〜からの創造界; *pravāhaḥ*—作られ、そして破壊される。

ビーシュマデーヴァが言った。「長いあいださまざまな話や義務に使われてきた私の思考、感情、望みを、いまこそ、あらゆる力を持つ主シュリー・クリシュナだけに向けます。主はつねに自己のうちで満たされておられるが、ときに、献愛者の指導者たる立場から、物質界に降誕して超越的な喜びを味あわれます。物質界は主だけによって創造されるのに」

要旨解説

ビーシュマデーヴァは、政治家、クル王家の代表者、偉大な將軍、そしてクシャトリヤの総帥でしたから、その心はさまざまな話題に分散され、思考・感情・望みはさまざまな話題に向けられていました。いま、純粋な献愛奉仕を達成するため、思考・感情・望みの力をすべて、至高の生物・主クリシュナに使いたいと考えています。主はここで献愛者の指導者、あらゆる力を持つ人物、と描写されています。主クリシュナは根源の人格主神で

すが、純粋な献愛者たちに献愛奉仕の恩寵を授けるためにみずから地球に降誕します。ときには主クリシュナご自身として、またときには主チャイタンニャとして降誕します。両者とも純粋な献愛者の指導者です。純粋な献愛者は、主に仕えること以外に望みはなく、そのためサートヴァタ (sātvata) と呼ばれることがあります。主はそのようなサートウヴァタの筆頭者です。ですからビーシュマデーヴァにも、それ以外の望みはありませんでした。物質的な望みすべてから浄化された人物でなければ、主はその指導者になろうとはしません。望みを消しさることはできませんが、浄化させることだけがが必要です。『バガヴァッド・ギーター』でも主自身が確証しているように、いつも主に仕えている純粋な献愛者の心のうちから教えをさずけます。そのような教えは物質的な目的ではなく、ふるさへ、神のもとに帰るためだけに与えられます (『バガヴァッド・ギーター』第10章・第10節)。物質自然を操りたいと思っている一般人には、それを許し、またその活動を見つめるだけではなく、献愛者でない者たちに神のもとに帰る教えはさずけません。それが、献愛者と非献愛者というさまざまな生命体に対する主の対応の違いです。主は全生命体の指導者であり、国王が囚人や自由な市民双方を治めるようなものです。しかし、主は献愛者と非献愛者とでは違った対応をします。献愛者でない者たちは主の教えをなんとも思いませんから、主はその場合沈黙を貫き、かれらの活動を目撃し、その結果が良かろうと悪かろうと与えるのです。献愛者はこの物質的な善悪を超えています。超越的道を邁進していますから、物質的なものを達成する望みはありません。また献愛者はシュリー・クリシュナが根源のナーラーヤナであることを知っています。主シュリー・クリシュナは、すべての物質創造の根源である完全分身カーラノーダカシャーイー・ヴィシュヌとして現われることを知っているからです。主も、純粋な献愛者との交流を望んでおり、そのために主は地球に降誕し、かれらを元気づけるのです。主は自分の意志で降誕します。物質自然の条件に強いられているわけではありません。ですから、ヴィブ (vibhu) ・全能者と呼ばれます。物質自然の法則に条件づけられることは絶対にありません。

第33節

त्रिभुवनकमनं तमालवर्णं
रविकरगौरवाम्बरं दधाने ।
वपुरलककुलावृताननाब्जं
विजयसखे रतिरस्तु मेऽनवद्या ॥ ३३ ॥

トウリ・ブヴァナ・カマナンム タマーラ・ヴァルナンム
tri-bhuvana-kamanam tamāla-varṇam

ラヴィ・カラ・ガウラ・ヴァラーナムバラナム ダダハーネー
ravi-kara-gaura-varāmbaram dadhāne

ヴァプル アラカ・クラヴリターナナーブジャンム
vapur alaka-kulāvṛtānanābjam

ヴィジャヤ・サケヘー ラティル アストウ メー ナヴァデーヤ
vijaya-sakhe ratir astu me 'navadyā

tri-bhuvana—3段階の天体系; *kamanam*—もっとも望ましい; *tamāla-varṇam*—タマラの木のように青みがかった色; *ravi-kara*—太陽光線; *gaura*—金色; *varāmbaram*—輝いている衣服; *dadhāne*—着ている方; *vapuḥ*—体; *alaka-kula-āvṛta*—ビャクダンの膏の絵で飾られて; *anana-abjam*—蓮華の花のような顔; *vijaya-sakhe*—アルジュナの友人に; *ratih astu*—主に魅了されるように; *me*—私の; *anavadyā*—活動の結果を望むことなく。

シュリー・クリシュナはアルジュナの親友です。主は超越的な体で地上に降誕し、その体はタマラの木の色がかった色を思わせます。主の体は、3天体系（上位・中間・下位）のどれをも惹きつけてやみません。主の輝く黄色の衣服と、ビャクダンの膏の絵で飾られた蓮華のお顔が、私の魅力の対象でありますように、そして私が活動の結果を望むことがありませんように。

要旨解説

シュリー・クリシュナは内なる喜びをとおして地上に降誕するとき、内なる力という代表者を使っておこないます。主の超越的な魅力的姿は、三界（上位・中間・下位）のどれも見たいと望んでいます。宇宙のどこを探しても、主クリシュナのような美しい姿は見つかりません。ですから主の超越的な体は、物質の創造物とはいっさい関係ありません。アルジュナはこの節で征服者、クリシュナはその親友と述べられています。ビーシュマデーヴァは、クルクシェートラの戦争が終わったあと、矢の寝台の上で主がアルジュナの馬車の御者のときに着ていた服を思い出しています。アルジュナとビーシュマが戦っていたとき、ビーシュマデーヴァはクリシュナの輝く衣服に心奪われ、敵のアルジュナが主を友人として持っていたことを間接的に認めています。アルジュナは主を友人に持っていたのですから、いつでも征服者です。ビーシュマデーヴァはこの機会に、主をヴィジャヤ・サケヘー (*vijaya-sakhe*) 「アルジュナの友」と呼んでいます。主はさまざまな崇高な思いをとおして献愛者と結ばれていますが、その献愛者にまつわる名前と呼ばれると、とくに嬉しく思います。クリシュナがアルジュナの戦車を操縦していたとき、クリシュナの服が太陽に照らされ、その光の反射が織りなす美しい色がビーシュマデーヴァの脳裏に強く焼きついていました。偉大な戦士として、騎士道精神をとおしてクリシュナとの関係を味わっていたのです。さまざまなラサ（感情）をとおした主との超越的な絆は、それぞれの献愛者によってもっとも高い法悦心として味あわれています。あたかも主と崇高な関係を持っているかのように見せかける知性のない俗人は、ヴラジャダーマの乙女たちの気持ちをまね

て、すぐに恋愛感情の関係に入ろうとします。そのような安っぽい関係は俗人の底意にある心理を露呈しています。主との恋愛感情を味わった人なら、一般的倫理観にでさえ反する俗な恋愛のラサに執着するはずがありません。特定の魂と主の永遠の絆は発展していくものです。生命体と至高主の真の絆は、5種類のラサからどのような形にでも発展していく、真実の献愛者の超越的段階で違いはまったくありません。ビーシュマデーヴァはこの模範であり、この偉大な将軍が主と超越的な絆を持っていることを、私たちは注意深く見きわめなくてはなりません。

第34節

युधि तुरगरजोविधूम्रविष्वक्-
 कचलुलितश्रमवार्यलङ्कृतास्ये ।
 मम निशितशरैर्विभिद्यमान-
 त्वचि विलसत्कवचेऽस्तु कृष्ण आत्मा ॥ ३४ ॥

ユディ トウラガ・ラジョー・ヴィドゥームラ・ヴィシュヴァク・
yudhi turaga-rajo-vidhūmra-viṣvak-

カチャ・ルリタ・シュラマヴァーリ・アランクリターツシェー
kaca-lulita-śramavāry-alan̄kṛtāsye

ママ ニシタ・シャライル ヴィビヒヂャマーナ・
mama niśita-śarair vibhidyamāna-

トゥヴァチ ヴィラサトウ・カヴァチェー ストウ クリシュナ アートマー
tvaci vilasat-kavace 'stu kṛṣṇa ātmā

yudhi—戦場で; *turaga*—馬; *rajaḥ*—埃; *vidhūmra*—灰色に変化した; *viṣvak*—うねっている; *kaca*—髪; *lulita*—散らばって; *śramavāri*—発汗; *alan̄kṛta*—～に飾られて; *āsye*—顔に; *mama*—私の; *niśita*—鋭い; *śaraiḥ*—矢によって; *vibhidyamāna*—～に貫かれて; *tvaci*—肌に; *vilasat*—喜びを味わっている; *kavace*—鎧に守られている; *astu*—そうなるように; *kṛṣṇe*—シュリー・クリシュナに; *ātmā*—心。

戦場（シュリー・クリシュナが友人を思う気持ちから参加した場所）では、流れるような主クリシュナの髪が馬のひずめで巻きあげられた埃で灰色に染まり、馬車の操縦に奮闘していた主のお顔には、玉の汗がにじんでいます。そのような飾りが私の鋭い矢で作られた傷によって鮮やかにきわだち、主はその様子を楽しまれました。そのような主に、私の心が惹かれますように。

要旨解説

主は、永遠性、至福、知識という絶対的な姿を持っています。そのため、5種類の関係、シャーンタ (sānta) ・ダーツシャ (dāśya) ・ヴァートウサリヤ (vātsalya) ・マードウリヤ (mādhurya) ——中立性・奉仕者・友愛・子の愛情・恋愛——をとおした主への超越的愛情奉仕は、それがほんとうの愛情や愛着で捧げられるとき、主によって恵み深く受け入れられます。シュリー・ビーシュマデーヴァは偉大な献愛者であり、主とは奉仕者の関係にありました。そのため、将軍が主の超越的な体めがけて放った鋭い矢は、ほかの献愛者が主に柔らかいバラの花を投げるのと同じ形の崇拜です。

ビーシュマデーヴァは、主にしたことを悔やんでいるように見えます。ところが、主の体は超越的な次元にあるため、主はまったく苦痛を感じていませんでした。主の体は物質ではありません。主と主の体は完全に精神的です。精神魂は突き刺されることも、焼かれることも、乾くことも、濡れることなどありません。『バガヴァッド・ギーター』もその事実を鮮明に説明しています。『スカンダ・プラーナ』にも同じ記述が見られ、「精神魂は決して穢れず、破壊されない」と述べられています。苦しめられることも、乾くこともありません。主ヴィシュヌが化身となって私たちのまえに現われると、物質存在のなかにいる条件づけられた魂のように見えますが、それは主が降誕したときから、主を殺そうとすきを狙っている悪魔・無信仰な人間たちを混乱させるためです。カムサはクリシュナを殺したいと思い、ラーヴァナもラーマを殺したいと思いました。しかし愚かなことに、主は決して殺されないことを知りませんでした。精神魂は決して消滅しないのですから。

ですから、ビーシュマデーヴァが主の体を矢で射抜いたことは不信心の無神論者には理解できないことですが、献愛者や解脱した魂は戸惑うことはありません。

ビーシュマデーヴァは、あらゆる面で慈悲深い主のことを高く評価しています。ビーシュマデーヴァが放った矢に苦慮していたのですが、アルジュナを気遣い、また戦場で容赦なく攻撃されたのに、他界しようとする自分をためらうことなく訪ねてくれたからです。ビーシュマの後悔の念と主の慈悲深い行為は、独特な背景があります。

シュリー・ヴィシュヴァナータ・チャクラヴァルティー・タークラは、恋愛感情で主に仕えていた偉大なアーチャーリヤ・献愛者で、この背景についてひじょうに印象的な意見を述べています。ビーシュマデーヴァの鋭い矢による主の体の傷は、主にとって、強い性的衝動から主の体を噛むフィアンセのように心地よいものである、というのです。異性同士が噛み合う行為は、体に傷ができたとしても、敵意によるものではありません。ですから、主と純粋な献愛者シュリー・ビーシュマデーヴァの超越的な愛情の交換としての戦闘行為は決して俗的なものではありません。さらに、主の体と主自身は同じですから、その絶対的な体に傷がつくはずがありません。一般の人は鋭い矢で作られた主の傷をふつうの傷と誤解するでしょうが、少しでも絶対的知識を持つ人なら、騎士道精神で交わされた超

越的な愛情の交換が理解できます。主は、ビーシュマデーヴァの鋭い矢で作られた傷を嬉しく思っているのです。Vibhidyamāna (ヴィビデヤマーナ) という言葉は重要です。主の皮膚は主と「異なることはない」からです。私たちの皮膚は私たちの魂とは異なるため、私たちの場合、vibhidyamāna、すなわち傷つけられる、切られるという言葉があてはまります。超越的至福にはさまざまな種類があり、俗世界のさまざまな活動は、その超越的至福がゆがんだ形で表わされたものです。俗世界にあるものはすべて俗的で欠陥だらけですが、絶対的世界ではすべてが同じ絶対的質をそなえているため、欠陥のないさまざまな楽しみがあります。主は偉大な献愛者ビーシュマデーヴァが作りだした傷を楽しんでいるのであり、またビーシュマデーヴァは騎士道精神で主と結ばれているため、傷ついたクリシュナを一心に思っているのです。

第35節

सपदि सखिवचो निशम्य मध्ये
निजपरयोर्बलयो रथं निवेश्य ।
स्थितवति परसैनिकायुरक्षणा
हतवति पार्थसखे रतिर्ममास्तु ॥ ३५ ॥

サバディ サキヒ・ヴァチョー ニシャミヤ マデエー
sapadi sakhi-vaco niśamya madhye

ニジャ・パラヨール パラヨー ラタハンム ニヴェーツシャ
nija-parayor balayo ratham niveśya

スティタヴァティ パラ・サイニカーユル アクシュナー
sthitavati para-sainikāyur akṣṇā

フリタヴァティ パールタハ・サケヘー ラティル ママーストゥ
hṛtavati pārtha-sakhe ratir mamāstu

sapadi—戦場で; sakhi-vacaḥ—友人の命令; niśamya—聞いたあと; madhye—～の中で; nija—主みずからの; parayoḥ—敵陣を; balayoḥ—力; ratham—馬車; niveśya—～に入っ
て; sthitavati—そこにいるあいだ; para-sainika—敵陣にいる兵士たちの; āyur—寿命;
akṣṇā—見渡すことで; hṛtavati—減少させる行為; pārtha—プリター (クンティ) の子ア
ルジュナの; sakhe—友人に; ratiḥ—近い関係; mama—私の; astu—そうなるように。

主シュリー・クリシュナは、友人の命令にしたがい、アルジュナ側とドゥリヨーダナ側
の両軍隊が結集したクルクシェートラの戦場に入り、戦闘がつづいていたあいだ、慈悲の
まなざしを投げかけて敵陣にいる兵士たちの寿命を縮めました。これは、敵兵を見つめる
だけで為されています。私の心がそのクリシュナに固定されますように。

要旨解説

『バガヴァッド・ギーター』（第1章・第21-25節）では、アルジュナが完全無欠の主シュリー・クリシュナに、両軍の只中に戦闘馬車を進めるようにと、さらには結集した敵兵たちを見終わるまで待つようにと命令しています。命じられた主は、まるで命令実行者のようにすぐに従いました。そして主は、敵方にいる重要人物をしめしながら「ここにビーシュマがいる、ドウローナがいる」などと教えました。主は至高の生物ですから、だれにとっても命令の提供者でも実行者でもありません。なおかつ、いわれのない慈悲心と純粹な献愛者に対する情愛から、指図されることを待っている召使いのように、献愛者の命令に従います。主は献愛者の命令に従うことに喜びを感じているのであり、それは父親が幼い我が子の言われるままにして喜んでいるような心境です。これは、主と献愛者の純粹で超越的な愛情があってこそ可能になることで、ビーシュマデーヴァにはそのことがよくわかっていました。だからこそ、主を「アルジュナの友」と呼んだのです。

主は、慈悲深いまなざしを向けて敵兵たちの寿命を縮めました。クルクシェートラの戦場に集まった兵士たちは、死ぬときに主に見られたことで解脱を達成したと言われていいます。ですから、アルジュナの敵兵たちの寿命を短くしたのは、アルジュナのためにしたものではありません。兵士たちが普段の生活のなかで死んでも解脱は達成できなかったのですから、主はかれらにも慈悲をさずけていたのです。死ぬときに主を見る機会にめぐまれ、物質生活から解放された、ということです。ですから、主はあらゆる面で善なる方であり、することすべてが万民の益になります。戦争の結果から見れば親友のアルジュナの勝利でしたが、じつはアルジュナの敵兵にも恩恵はさずけられていました。それが主の超越的な活動であり、このことを理解する人はだれでも、肉体を終えたあとに解脱の境地に入っていきます。主はつねにあらゆる面で善なる方ですから、どのような状況でもまちがったことはしません。

第36節

व्यवहितपृतनामुखं निरीक्ष्य
स्वजनवधाद्धिमुखस्य दोषबुद्ध्या ।
कुमतिमहरदात्मविद्यया य-
श्चरणरतिः परमस्य तस्य मेऽस्तु ॥ ३६ ॥

ヴァヴァヒタ・プリタナー・ムカハム ニリークッシャ
vyavahita-ṣṛtanā-mukhaṁ nirīkṣya

スヴァ・ジャナ・ヴァダハードウ ヴィムカハッシャ ドーシャ・ブッヂャー
sva-jana-vadhād vimukhasya doṣa-buddhyā

クマティンム アハラドゥ アートウマ・ヴィデヤヤー ヤシュ
kumatim aharad ātma-vidyayā yaś

チャラナ・ラティヒ パラマッシャ タッシャ メー ストゥ
carāṇa-ratiḥ paramasya tasya me 'stu

vyavahita—離れたところに立っている; *prtanā*—兵士たち; *mukham*—顔; *nirikṣya*—見ること; *sva-jana*—親族; *vadhāt*—殺すという行為から; *vimukhasya*—ためらっている者; *doṣa-buddhyā*—穢れた知性によって; *kumatim*—貧弱な知識; *aharat*—根絶した; *ātma-vidyayā*—超越的知識によって; *yaḥ*—～である主; *carāṇa*—足に; *ratiḥ*—魅力; *paramasya*—至高主の; *tasya*—主に向かって; *me*—私の; *astu*—そうなるように。

アルジュナが、目のまえにいならぶ兵士や指揮官たちを見て無知に穢されたように思われたとき、主は超越的知識をさずけてその無知を取りのぞきました。主の蓮華の御足が私の魅力の対象でありつづけますように。

要旨解説

王や指揮官は戦士たちと前線に結集する——それがほんとうの戦いです。当時の王や指揮官と現代の大統領や国防大臣は比較の対象にさえなりません。哀れな兵士や傭兵たちが敵軍と睨みあっているときに、自宅で安息の時間にひたる現代の指導者たち。民主主義の現代では当たりまえのことかもしれませんが、世の中で真の君主制で治められていたときには、君主の質のかけらもない臆病者はいませんでした。クルクシェートラの戦いの記録からわかるように、ドウローナ、ビーシュマ、アルジュナ、ドウリョーダナといった両軍の武将たちは眠っている暇はありませんでした。国民の居住区から遠く離れた場所として選ばれた戦場に全員が結集したのです。つまり、戦争に加わらない市民は対立する王家の戦闘に影響されないということです。市民には、戦闘の様子を見る必要もありませんでした。かれらには、アルジュナであろうとドウリョーダナであろうと、収入の4分の1を支配者に支払う義務がありました。アルジュナは、クルクシェートラの戦場で両軍の司令官たちが睨みあっている様を目のあたりにし、これから王国のために親族を殺さなくてはならない現実に直面し、かれらを哀れみ、そして嘆きました。ドウリョーダナが率いる大軍勢に恐れをなしたわけではなく、慈悲深い献愛者ゆえに、俗なことを放棄するのが自分にふさわしいと考え、物質的財産のためには戦わないことを決意したのでした。しかし、これは知識不足がもとで行きついた考えであり、そのために「穢れた知性」と表現されています。しかし、『バガヴァッド・ギーター』の第4章で明言されているように、献愛者としていつも主と行動していたアルジュナの知性が穢れるはずがありません。知性が穢れたように見えますが、それは、このようないきさつがなければ、肉体観念に束縛された条件づけられた魂を幸福にする『バガヴァッド・ギーター』の教えは語られなかったはずで

『バガヴァッド・ギーター』は、肉体と魂を同一視する概念を持つ世界中の条件づけられた魂を救い、至高主と魂の永遠の絆をふたたび築くために説かれました。アートマ・ヴィデヤー (ātma-vidyā) 「主の超越的知識」は、宇宙全体の全生命体の恩恵のために、主によって語られたのです。

第37節

स्वनिगममपहाय मत्प्रतिज्ञा-
मृतमधिकर्तुमवप्लुतो रथस्थः ।
धृतरथचरणोऽभ्ययाच्चलद्गु-
हरिरिव हन्तुमिभं गतोत्तरीयः ॥ ३७ ॥

スヴァ・ニガマンム アパハーヤ マトウ・プラティギヤーンム
sva-nigamam apahāya mat-ṭratijñām

リタンム アディカルトウンム アヴァプルトー ラタハスタハ
ṛtam adhikartum avapluto rathasthaḥ

ドゥリタ・ラタハ・チャラノー ビヤヤーチ チャラドゥグル
dhṛta-ratha-caraṇo 'bhyayāc caladgur

ハリル イヴァ ハントウンム イバハンム ガトーットアリーヤハ
harir iva hantum ibham gatottariyaḥ

sva-nigamam—自分の誠実さ; *apahāya*—破棄するために; *mat-ṭratijñām*—私の約束; *ṛtam*—事実の; *adhi*—もっと; *kartum*—それをするために; *avaplutaḥ*—降りること; *ratha-sthaḥ*—戦闘馬車から; *dhṛta*—取りあげて; *ratha*—戦闘馬車; *caraṇaḥ*—車輪; *abhyayāt*—急いで; *caladguḥ*—大地を踏みつけて; *hariḥ*—ライオン; *iva*—~のように; *hantum*—殺すために; *ibham*—象; *gata*—~を横に残して; *uttariyaḥ*—着ていた衣服。

主は、私の望みを満たすために約束を破り、馬車から飛びおり、車輪をつかみ、着ていた服さえ落としながら私に猛然と襲いかかりました。ライオンが象を殺すために飛びかかるように。

要旨解説

クルクシェートラの戦場は軍則に則って戦われましたが、同時に、スポーツ精神のような、友人が友人に戦いを挑む雰囲気さえ漂っていました。ドゥリヨーダナはビーシュマデーヴァに向かって、「あなた様はご自分をアルジュナの父親のように思っておられる。だから殺すことを躊躇されているのだ」と悪態をついています。戦いの精神を無視している、などと非難されてはクシャトリヤとして黙ってられません。そこでビーシュマデーヴァ

は、ある特別の武器を使って翌日全員を殺すと約束しました。ドゥリョーダナはその言葉に満足し、翌日の戦闘に使われる矢を自分が持っていることにしました。しかしアルジュナが一計を案じてドゥリョーダナからその矢を取りあげると、ビーシュマデーヴァはそれが主クリシュナの計略であることを見抜きました。ビーシュマデーヴァは翌日、「クリシュナはどうしても武器を手にする、さもなくば友人のアルジュナは死ぬ」という誓いをたてました。翌日、ビーシュマデーヴァは熾烈な戦いを繰りひろげ、アルジュナもクリシュナも苦戦を強いられます。アルジュナは息も絶え絶えになり、もはやビーシュマデーヴァに殺されるのは時間の問題でした。このとき主クリシュナは、自分の約束よりも価値のあるビーシュマの約束を守り、かれを喜ばせたいと考えました。つまり、主が約束を破ることになります。主は、クルクシェートラの戦いの火蓋が切って落とされるまえ、両軍のために武器は使わず、武力も行使しないと約束していました。しかし、アルジュナを守ろうと馬車から飛びおり、馬車の車輪を持ちあげ、ライオンが象に襲いかかるように、憤怒の形相でビーシュマデーヴァにむかって突進しました。途中、着ていた服を落としたのですが、あまりの怒りに落としたことさえ気づかなかったほどです。ビーシュマデーヴァは持っていた武器をすぐに捨て、愛する主・クリシュナに殺されるために立ちあがりました。その瞬間、その日の戦いの時間が終わり、アルジュナはこうして救われました。もちろん、主みずから馬車に乗っているのですからアルジュナが死ぬことはありえませんでした。ビーシュマデーヴァは主クリシュナが友人を助けるために武器を持つかどうか見定めたいと思っていたため、アルジュナを瀕死の状態にしたのです。主は車輪をつかんでビーシュマデーヴァのまえに立ちはだかり、ビーシュマデーヴァの約束が叶ったことをしめしたのでした。

第38節

शितविशिखहतो विशीर्णदंशः
क्षतजपरिप्लुत आततायिनो मे ।
प्रसभमभिसार मद्दुधार्थं
स भवतु मे भगवान् गतिर्मुकुन्दः ॥ ३८ ॥

シタ・ヴィシカハ・ハトー ヴィシールナ・ダンムシャハ
śita-viśikha-hato viśīrṇa-damśaḥ

クシャタジャ・パリプルタ アータターイノー メー
kṣataja-paripluta ātatāyino me

プラサバハンム アビヒササーラ マドウ・ヴァダハールタハンム
prasabham abhisasāra mad-vadhārtham

サ バハヴァトウ メー バハガヴァーン ガティル ムクンダハ
sa bhavatu me bhagavān gatir mukundaḥ

śita—鋭い; viśikha—矢; hataḥ—～で傷つけられた; viśirṇa-damśaḥ—散らばった盾; kṣataja—傷によって; pariplutaḥ—血まみれ; ātatāyinaḥ—強大な侵略者; me—私の; prasabham—怒って; abhisasāra—動き出した; mat-vadha-artham—私を殺す目的で; saḥ—主は; bhavatu—～になるように; me—私の; bhagavān—人格主神; gatiḥ—目的地; mukundaḥ—解脱を授ける方。

解脱の境地を授ける主シュリー・クリシュナ、人格主神が、私の究極の目標となりますように。主は戦場で私に襲いかかりました。私が放った鋭い矢で傷つけられて逆上したかのように。主の盾は砕け散り、体は傷から流れだした血で真っ赤に染まっていました。

要旨解説

クルクシェートラの戦場での主クリシュナとビーシュマデーヴァのかけひきはじつに興味深いものです。シュリー・クリシュナはアルジュナには惜しみなく愛情をかけ、ビーシュマデーヴァには敵意をむきだしている。しかしこれは、主の偉大な献愛者であるビーシュマデーヴァに対する特別な恩寵をしめす行為だったのです。そのようなかけひきから、献愛者は敵となって主を喜ばせることができる、という驚くべき事実が浮かびあがってきます。主は絶対的な方ですから、敵を装う純粋な献愛者からでも奉仕を受けとってくれます。至高主に敵がいるはずもなく、また敵も主を傷つけることさえできません。主はアジタ (ajita) 「征服できない方」ですから。それでも主は、純粋な献愛者がまるで敵のように主を叩いたり、立場が上であるかのように主を叱ったりすると（主より優れた者はいなくても）喜びを感じます。これが、献愛者の主との超越的な付きあい方です。純粋な献愛奉仕についてなにも知らなければ、そのような不思議な愛情交換を理解することはできません。ビーシュマデーヴァは剛勇の戦士として行動し、意図的に主の体を矢で射貫いていました。一般の人には主を傷つける行為に見えますが、じつは献愛者でない人たちを当惑させるための行動だったのです。完全に精神的な体が傷つけられることはありませんし、献愛者が主の敵になることもありません。ビーシュマデーヴァがそう思っていたとしたら、その主を人生の究極目標として望むはずがありません。ビーシュマデーヴァがほんとうの敵なら、主クリシュナは指ひとつ動かさずにかれを殺すこともできます。満身創痕の、血まみれの体でビーシュマデーヴァのまえに立ちただかる必要もありません。しかし主はそうしています。つまり戦士の献愛者は、純粋な献愛者によって作られた傷で飾られた主の超越的な美しさを見たいのです。これが、超越的なラサの交換、つまり主と召使いの関係です。主と献愛者がそのように接することで、両者の独特の立場が讃えられるのです。主は、ビーシュマデーヴァに襲いかかったときにアルジュナに止められて激怒しましたが、止められても、そんな邪魔など気にすることなく、愛人が愛人を求めるように突き進みま

した。主はビーシュマデーヴァを殺す覚悟でいるように見えますが、じつは偉大な献愛者であるかれを喜ばせようとしていました。主は、言うまでもなく条件づけられた魂を救う方です。非人格論者は主から解脱を授かろうとし、主はその熱望に応じて報います。しかしこの節で見られるように、ビーシュマデーヴァは個人としての主の姿を見たいと思っていました。純粋な献愛者はだれもがそのような望みを持っているのです。

第39節

विजयरथकुटुम्ब आत्तोत्रे
धृत्तहरश्मिनि तच्छिष्येक्षणीये ।
भगवति रतिरस्तु मे मुमूर्षो-
र्यमिह निरीक्ष्य हता गताः स्वरूपम् ॥ ३९ ॥

ヴィジャヤ・ラタハ・クトウンムバ アーッタ・トートウレー
vijaya-ratha-kuṭumba ātta-totre

ドウリタ・ハヤ・ラシュミニ タチ・チリエークシャニーエー
dhṛta-haya-raśmini tac-chriyekṣaṇīye

バハガヴァティ ラティル アストウ メー ムムールショール
bhagavati ratir astu me mumūrṣor

ヤンム イハ ニリークッシャ ハター ガターハ スヴァ・ルーパム
yam iha nirikṣya hatā gatāḥ sva-rūpam

vijaya—アルジュナ; *ratha*—戦闘馬車; *kuṭumbe*—あらゆる危険を冒しても守る対象者; *ātta-totre*—右手にむちを持って; *dhṛta-haya*—馬を操っている; *raśmini*—手綱; *tat-śriyā*—美しく立っている; *ikṣaṇīye*—見ること; *bhagavati*—人格主神に; *ratih astu*—私の魅力がそう向けられるように; *me*—私の; *mumūrṣoḥ*—今まさに死のうとしている者; *yam*—～である者に; *iha*—この世界の; *nirikṣya*—見つめることで; *hatāḥ*—死んだ人々; *gatāḥ*—達して; *sva-rūpam*—根源の姿。

死の瞬間に、私の究極の思いがシュリー・クリシュナ、人格主神に惹きつけられますように。アルジュナの戦闘馬車の御者となって、右手にむちを持ち、左手に手綱を持ち、あらゆる手段をつくしてアルジュナの馬車を守ろうとされる主に、心を集中させます。クルクシェートラの戦場にいる主を見た者は、死後、根源の姿に到達するのです。

要旨解説

主の純粋な献愛者は、自分のうちにいつも主を見えています。愛情奉仕をとおして崇高な関係で結ばれているからです。一瞬たりとも主を忘れることができません。これが真の法

悦境です。神秘家 (yogī) は、自分の感覚をいっさいの物事から切りはなして抑制することで、超靈魂に心を集中させ、そして最後にサマーディ (samādhi) に到達します。しかし献愛者は、主の聖なる名前、名声、娯楽などを思いながら主の姿を瞑想することで、もっとかんたんにサマーディの境地に入ります。ですから、神秘的ヨーギーと献愛者の瞑想は同じ段階ではありません。神秘家の瞑想は規則に従うだけの方法ですが、純粋な献愛者の瞑想は穢れのない愛情と自然な愛着からなされています。ビーシュマデーヴァは純粋な献愛者で、軍の高官として、主をパールタ・サーラティ (Pārtha-sārathi) 「アルジュナの戦闘馬車の御者」という主の戦場での姿をいつも思っていました。ですから、主のパールタ・サーラティの娯楽も永遠です。主の崇高な娯楽は、カムサの宮殿内の牢獄で誕生した時点から、最後のマウサラ・リーラー (mausala-līlā) にいたるまで、時計の針が1つの点から次の点に移るように、全宇宙のなかを次々に巡っておこなわれます。そして、そのような娯楽にくわわるパандаヴァやビーシュマのような交流者はつねに永遠の仲間でもあります。ですからビーシュマデーヴァは、アルジュナでさえ見ることのできなかつた主のパールタ・サーラティの美しい主の姿は決して忘れませんでした。アルジュナはその美しいパールタ・サーラティのうしろにいましたが、ビーシュマデーヴァは主のすぐまえにいました。主が戦っているときの姿については、ビーシュマデーヴァのほうがアルジュナよりも堪能していたのです。

クルクシェートラの戦場にいたすべての兵士や人物たちは、戦死したあと自分たち本来の姿を達成しています。主のいわれのない慈悲のおかげで、戦場で主と顔を合わせることができたからです。水生生物からブラフマーにいたる進化の循環を漂っている条件づけられた魂たちは、マーヤーの姿、すなわち自分の行動の結果として得た姿、そして物質自然によって与えられた姿のなかにいます。条件づけられた魂の物質的姿は、どれも外側の衣服であり、条件づけられた魂が物質エネルギーから解放されるとき、自分本来の姿を得ます。非人格論者は、主のブラフマンの光に入りたがっていますが、主の部分体でもある精神的火花の本質に反する状態です。そのため、非人格論者はふたたび転落し、精神魂には偽りでしかない物質的姿に入ります。献愛者は、2本腕、あるいは4本腕をした主の姿のような精神的姿を、魂本来の特質にふさわしい姿としてヴァイクンタあるいはゴーローカ惑星に入って達成します。100パーセント精神的なこの姿は、生命体のスヴァルーパ (svarūpa) であり、クルクシェートラの戦場に集まった両軍の兵士は全員、ビーシュマデーヴァが確証したようにスヴァルーパを達成しています。ですから、主シュリー・クリシュナは、もちろんパандаヴァ兄弟たちに慈悲をさずけましたが、戦った全員が同じ結果を授かっています。主の交流者という立場に疑いの余地はありませんが、ビーシュマデーヴァは同じ恩恵を主に求め、またそれが主への祈りでもありました。結論は、人格主神を心のうちで、あるいは目のまえに見ながら死ぬ人はすべて、人生の最高完成である自分のスヴァルーパを達成する、ということです。

第40節

ललितगतिविलासवल्गुहास-
प्रणयनिरीक्षणकल्पितोरुमानाः ।
कृतमनुकृतवत्य उन्मदान्धाः
प्रकृतिमगन् किल यस्य गोपवधुः ॥ ४० ॥

ラリタ・ガティ・ヴィラーサ・ヴァルグハーサ・
lalita-gati-vilāsa-valguhāsa-

プラナヤ・ニリークシャナ・カルピトールマーナーハ
praṇaya-nirīkṣaṇa-kalpitorumānāḥ

クリタ・マヌ・クリタ・ヴァत्या ウンマダーンダハーハ
kṛta-manu-kṛta-vatyā unmadāndhāḥ

プラクリティンム アガン キラ ヤッシャ ゴーパ・ヴァドゥウヴァハ
prakṛtim agan kila yasya gopa-vadhvaḥ

lalita—魅力的な; *gati*—動き; *vilāsa*—魅惑的な行動; *valguhāsa*—優しい微笑み; *praṇaya*—愛のこもった; *nirīkṣaṇa*—～を見つめている; *kalpita*—心理; *urumānāḥ*—高く讃えられている; *kṛta-manu-kṛta-vatyāḥ*—動きをまねて; *unmada-andhāḥ*—法悦のなかで我を忘れて; *prakṛtim*—特徴; *agan*—耐えた; *kila*—確かに; *yasya*—～である者の; *gopa-vadhvaḥ*—牛飼いの乙女たち。

私の心が主シュリー・クリシュナに固定されますように。主のしぐさ、愛情あふれる微笑みに、ヴラジャダーマの乙女たち（ゴーピーたち）はとりこになり、主がラーサの踊りから姿を隠したあと、その独特のしぐさをまねました。

要旨解説

ヴラジャブーミの乙女たちは、強烈な法悦境のなかで仕えながら、主と同じ境地に入り、主と同じ思いで踊り、夫婦愛で抱擁し、おどけて笑いあったり、愛情をこめて主を見つめたりしました。もちろん、主とアルジュナの関係はビーシュマデーヴァのような献愛者にとっては讃えるにふさわしいものですが、ゴーピーたちと主の関係ではさらに純粋な愛情がこめられているため、さらに讃える価値があります。アルジュナは、主の恩寵を授かって御者として兄弟愛をこめて仕えることができましたが、主と同じ力を授かってはいません。しかしゴーピーたちは、主と同じ境地に入って主とほぼ一体になっています。ゴーピーたちを思いだそうとするビーシュマの思いは、生涯を閉じるときにかのじよたちから慈悲を授かろうとする祈りだったのです。主は純粋な献愛者が讃えられるほうがより大きな満足感を味わうことから、ビーシュマデーヴァは、自分が愛情をかけたアルジュナの行動

を讃え、さらに主に愛情奉仕をして比類のない境地に入ったゴープーたちをも思いだしています。ゴープーと主の対等性は、非人格論者が言うサーユジャ (sāyujya) の解脱とはまったく違います。その対等性は完璧な法悦境のひとつであり、愛する者と愛される者の興味が同じものになるため、互いに同じ意識を共有しています。

第 4 1 節

मुनिगणनृपवर्यसंकुलेऽन्तः-

सदसि युधिष्ठिरराजसूय एषाम् ।

अर्हणमुपपेद ईक्षणीयो

मम दृशिगोचर एष आविरात्मा ॥ ४१ ॥

ムニ・ガナ・ヌリパ・ヴァリヤ・サンクレー ンタハ・
muni-gaṇa-nṛpa-varya-saṅkule 'ntaḥ-

サダシ ユディシュティラ・ラージャスーヤ エーシャーンム
sadasī yudhiṣṭhira-rājasūya eṣām

アルハナンム ウパペーダ イークシャニーヨー
arhaṇam upapeda īkṣaṇīyo

ママ ドウリシ・ゴーチアラ エーシャ アーヴィル アートウマー
mama dṛśi-gocara eṣa āvir ātmā

muni-gaṇa—偉大で博識な聖者たち; nṛpa-varya—統治する偉大な王たち; saṅkule—盛大な集会で; antaḥ-sadasī—会議; yudhiṣṭhira—皇帝ユディシュティラの; rāja-sūye—盛大な儀式の執行; eṣām—偉大な名士たちの; arhaṇam—敬意をこめた崇拜; upapeda—受けた; īkṣaṇīyaḥ—魅力の対象者; mama—私の; dṛśi—視野; gocaraḥ—～の視野のなか; eṣaḥ āviḥ—みずから出席して; ātmā—その魂。

マハーラージャ・ユディシュティラが主宰したラージャスーヤ・ヤギヤ (儀式) には、世界中の名士、王族、学識階級者が多数出席し、その盛大な集まりのなかで、主シュリー・クリシュナが満場の参加者によって、もっとも高貴な人格主神として崇拜されました。私も同席しており、私の心を主に固定させるためにこの出来事を思いだしています。

要旨解説

マハーラージャ・ユディシュティラは、クルクシェートラの戦争で勝利をおさめたあと、世界の皇帝として、ラージャスーヤの儀式を執行しました。当時の皇帝は王座に就くと、自分の主権を宣言するために世界中の王国に挑戦状を送りつけ、受けとった各国の支配者である王子や王は、服従・不服従のいずれかを、挑戦を受けて立つか無言の快諾かを自由

に選択することができました。挑戦を受けて立つ者は、その皇帝と戦いをまじえ、勝利をおさめることで自分の優位性を確立させなくてはなりません。敗北者は命を犠牲にするか、地位を別の王や支配者に譲ることになります。マハーラージャ・ユディシュティラもそのような挑戦状を世界中に送り、受けとった王子や王たちは、ユディシュティラ王の指導権を世界の皇帝として受け入れたのでした。このあと、マハーラージャ・ユディシュティラの体制下にある世界中の支配者たちは、盛大なラージャスーヤの儀式に参加するよう招かれました。その儀式には膨大な資金が必要になり、度量の狭い王ができることはありません。費用がかかりすぎ、また現状では執行困難になり、カリ・ユガとなった現代には不可能な儀式です。さらに、儀式を執行できるほど熟達した僧侶を確保することもできません。

こうして、招かれた世界中の王や博識な大聖者たちがマハーラージャ・ユディシュティラの住む王都に集結し、そのなかには偉大な哲学者、宗教家、医者、科学者や偉大な聖者を含む学識者階級の人々がいました。つまり、ブラーフマナとクシャトリヤは社会の筆頭の指導者であり、全員がその集會に参加するよう招かれたということです。ヴァイシャとシュードラはそれほど重要な地位にはいないため、ここでは述べられていません。現代では社会そのものが変化したため、重要な地位にある人々も、本務に応じて変化しています。

この盛大な集會で、主シュリー・クリシュナが万人注視の的になっていました。だれもが主クリシュナを見たいと願ひ、主に慎ましい敬意を捧げたいと思っていました。ビーシュマデーヴァはこの出来事をすべて覚えており、自分の崇拜する主・人格主神が、今日のまゑに立っていることを嬉しく思いました。このように、至高主の瞑想とは、その活動・姿・娯楽・名前・名声を瞑想することを指します。それは、至高者の形のない姿を想像することよりもずっとたやすくできます。『バガヴァッド・ギーター』（第12章・第5節）でも、至高者の非人格的様相を瞑想することは困難をきわめる、と明言されています。またそれは、望んでいる結果はほとんど得られない名ばかりの瞑想で、時間の無駄にすぎません。しかし献愛者は主のじっさいの姿や娯楽を瞑想しますから、かんたんに主に近づくことができます。これは『バガヴァッド・ギーター』（第12章・第9節）でも述べられていることです。主と主の崇高な活動に違いはありません。このシュローカでしめされているのは、主シュリー・クリシュナが地上にいたとき、とくにクルクシェートラの戦場に関連して、至高人格主神としてではなかったとしても、当時もっとも気高い人物として受けいられていた、ということです。偉大な人物が死んだあとに神として崇拜されるのは正しくありません。人間は死んでも神にはなれないからです。人格主神にしても、地上に降誕したら人間になるというわけではありません。どちらもまちがった考えです。神人同形論という考えは、主クリシュナの場合にはあてはまりません。

第42節

तमिममहमजं शरीरभाजां
हृदि हृदि धिष्ठितमात्मकल्पितानाम् ।
प्रतिदृशमिव नैकधार्कमेकं
समधिगतोऽस्मि विधूतभेदमोहः ॥ ४२ ॥

タンム イマンム アハンム アジャンム シャリーラ・パハージャーナム
tam imam aham ajam śarīra-bhājām

フリディ フリディ ディシュティタンム アートウマ・カルピターナーナム
hṛdi hṛdi dhiṣṭhitam ātma-kalpitanām

プラティドウリシャンム イヴァ ナイカダハールカンム エーカンム
pratidr̥śam iva naikadhārkam ekam

サマディ・ガトー スミ ヴィドウータ・ベヘダ・モーハハ
samadhi-gato 'smi vidhūta-bheda-mohaḥ

tam—その人格主神; *imam*—今私の前におられる; *aham*—私; *ajam*—生まれることのない方; *śarīra-bhājām*—条件づけられた魂の; *hṛdi*—心の中の; *hṛdi*—心の中の; *dhiṣṭhitam*—位置して; *ātma*—超靈魂; *kalpitānām*—推論家の; *pratidr̥śam*—あらゆる方向に; *iva*—~のように; *na ekadhā*—1つではない; *arkam*—太陽; *ekam*—1つだけ; *samadhi-gataḥ asmi*—私は瞑想して法悦境に入った; *vidhūta*—~から解放されて; *bheda-mohaḥ*—二元性という誤解。

いま私のまえに立っておられる唯一の主、シュリー・クリシュナを、私は完全に集中して瞑想することができます。主が全生命体の心のなかに、そして推論家の心にさえいるという二元性の誤解を克服したからです。主はすべての人々の心にいます。太陽はさまざまな視点から見られるでしょうが、太陽はひとつです。

要旨解説

主シュリー・クリシュナは、唯一の絶対至高人格主神ですが、人智を超えた力を使って無数の完全部分体のみずからを拡張させました。二元性は、主の想像を絶する力を知らないうちに生じます。『バガヴァッド・ギーター』（第9章・第11節）で主は、愚かな者だけが主をふつうの人間と考える、と言っています。愚かな者は人智を絶した主の力を知りません。その力をおして主はだれもの心のなかにおり、それは太陽が全世界の人々のまえに姿を見せている様子に似ています。主のパラマートマーの姿は主の完全拡張体です。人智を絶した力でだれもの心のなかにパラマートマーとして入ったり、自分の光を拡張させてブラフマジョーティ (*brahmajyoti*) というまばゆい光としてみずからを拡張させたり

します。『ブラフマ・サムヒター』では、「ブラフマジヨーティは主の体の光である」と表現されています。ですから、主と主の体の光、また完全部分体のパラマートマーのあいだに違いはありません。この事実を知らない知性の乏しい人たちは、ブラフマジヨーティとパラマートマーはシュリー・クリシュナとは違う、と考えます。この二元性の誤解は、ビーシュマデーヴァの心から完全に取りのぞかれ、いま、主シュリー・クリシュナこそがいっさい万物のなかでもっとも大切な方であるという悟りに満足しています。この悟りは、偉大なマハートマー (mahātmā) ・献愛者が到達するもので、『バガヴァッド・ギーター』(第7章・第19節)では、ヴァースデーヴァが万物の根源であり、ヴァースデーヴァ以外に存在しているものはなにもない、と言われています。ヴァースデーヴァ、主シュリー・クリシュナは、このマハージャナによって確証されているように根源の至高者であり、初心の献愛者も純粋な献愛者もマハージャナの足跡に従わなくてはなりません。それが献愛奉仕の継承の道です。

ビーシュマデーヴァが崇拝する方はパールタ・サーラティとしての主シュリー・クリシュナであり、ゴーピーたちはヴリンダーヴァンにいる同じクリシュナで、もっとも魅力的なシャーマスンドラを崇拝します。ときに、知性の乏しい学者は、ヴリンダーヴァンのクリシュナと、クルクシェートラの戦場にいるクリシュナを別人と考えたりします。しかしビーシュマデーヴァにこのような誤解はかけられません。非人格論者でさえ瞑想をしますが、その対象は、姿のないジヨーティ (光) としてのクリシュナであり、ヨーギーが対象にするパラマートマーもクリシュナです。クリシュナはブラフマジヨーティや局所に存在するパラマートマーですが、ブラフマジヨーティのなかにもパラマートマーのなかにもクリシュナはいませんし、クリシュナとの甘露な関係も存在しません。主の個人の姿として、主はパールタ・サーラティやヴリンダーヴァンのシャーマスンドラですが、非人格的姿としては、主はブラフマジヨーティやパラマートマーのなかにはいません。ビーシュマデーヴァのような偉大なマハートマーは、主シュリー・クリシュナのこれらすべての様相を理解していますから、主クリシュナをすべての姿の根源として崇拝するのです。

第43節

सूत उवाच

कृष्ण एवं भगवति मनोवाग्दृष्टिवृत्तिभिः ।

आत्मन्यात्मानमावेश्य सोऽन्तःश्वास उपारमत् ॥ ४३ ॥

スータ ウヴァーチャ

sūta uvāca

クリシュナ エーヴァンム バハガヴァティ

kṛṣṇa evaṁ bhagavati

マノー・ヴァーグ・ドウリシュティ・ヴリッティビヒ
mano-vāg-dṛṣṭi-vṛttibhiḥ

アートウマニ アートウマーナム アーヴェーッシャ
ātmany ātmānam āveśya

ソー ンタフシュヴァーサ ウパーラマトウ
so 'ntaḥśvāsa upāramat

sūtaḥ uvāca—スータ・ゴースヴァーミーが言った; *kṛṣṇe*—主クリシュナ、至高人格主神; *evam*—～だけ; *bhagavati*—主に; *manaḥ*—心と; *vāk*—発言; *dṛṣṭi*—視覚; *vṛttibhiḥ*—活動; *ātmani*—超靈魂に; *ātmānam*—生命体; *āveśya*—～の中に融合して; *saḥ*—彼; *antaḥ-śvāsaḥ*—息を吸っている; *upāramat*—静かになった。

スータ・ゴースヴァーミーが言った。「こうしてビーシュマデーヴァは、心、言葉、視覚、行動などをすべて超靈魂、主シュリー・クリシュナ、至高人格主神に没入させた。静かになったあと、やがて呼吸が停止した」

要旨解説

ビーシュマデーヴァが他界するときには到達した境地は、心を主への思いに没頭させ、主のさまざまな活動を瞑想したことから、ニルヴィカルパ・サマーディ (*nirvikalpa-samādhi*) と言われます。主の栄光を唱え、自分の目のまえに主を見て、やがて意識を逸らすことなくすべての活動を主に集中させたのです。これがもっとも気高い完成境地であり、献愛奉仕を修練すればこの境地にはだれでも到達できます。主への献愛奉仕には、9種類の奉仕があります。(1)聞くこと、(2)唱えること、(3)思いだすこと、(4)蓮華の御足に仕えること、(5)崇拜すること、(6)祈ること、(7)命令を実行すること、(8)親しく交わること、(9)完全に身をゆだねること。このなかのひとつ、あるいはすべてに、望んでいる結果をもたらす力がこめられていますが、熟達した献愛者に導かれながら根気よく修練しなくてはなりません。最初の項目である「聞く」という手段は9つのうちでもっとも重要ですから、まず『バガヴァッド・ギーター』を聞き、つぎに『シュリーマド・バーガヴァタム』を聞くことは、生涯を終えるときにビーシュマデーヴァと同じ境地を望む志願者には不可欠です。ビーシュマデーヴァが息を引き取るときの独特の境地に入ることは、主クリシュナがその場にいなくてもできることです。『バガヴァッド・ギーター』あるいは『シュリーマド・バーガヴァタム』にある主の言葉は、主そのものです。これらの聖典は主の音の権化であり、その教えを活用すれば、8人のヴァスであるシュリー・ビーシュマデーヴァの境地に到達する資格を得ることができます。人も動物もいつか死ぬ定めがありますが、ビーシュマデーヴァのように他界する魂は完璧な境地を達成し、自然の法則に強いられて死ぬ魂は動物のように死んでいきます。それが人間と動物の違いです。人間としての生活は、とくにビー

シュマデーヴァのようにこの世を去っていくためにあるのです。

第44節

सम्पद्यमानमाज्ञाय भीष्मं ब्रह्मणि निष्कले ।
सर्वे बभूवुस्ते तूष्णीं वयांसीव दिनात्यये ॥ ४४ ॥

サンムパデヤマーナム アーギヤーヤ
sampadyamānam ājñāya

ビヘーシュマンム プラフマニ ニシュカレ
bhīṣmam brahmaṇi niṣkale

サルヴェー バブフーヴス テー トウーシュニーナム
sarve babhūvus te tūṣṇīm

ヴァヤーンムシーヴァ ディナーテヤイエー
vayāmsīva dinātyaye

sampadyamānam—～の中に没入して; *ājñāya*—このことを知ったあと; *bhīṣmam*—シュリー・ビーシュマデーヴァについて; *brahmaṇi*—至高の絶対者のなかに; *niṣkale*—無限の; *sarve*—居合わせた全員; *babhūvuḥ te*—全員が～になった; *tūṣṇīm*—沈黙して; *vayāmsīva*—鳥のように; *dina-atyaye*—1日の終わりに。

ビーシュマデーヴァが至高の絶対者の無限なる永遠性に入ったことを知り、その場にいた人々すべてが水を打ったように静まりかえった。1日の終わりに鳥たちが寝静まるように。

要旨解説

至高の絶対者の無限なる永遠性に入る、あるいは没入する、という意味は、生命体のふるさとに入ることを指しています。生命体は絶対人格主神の構成部分ですから、仕える者と仕えられる者という絆で主と永遠に結ばれています。主は、すべての部分体の奉仕を受けていますが、それは機械全体が各部分によって仕えられている、という状態に似ています。機械のどの部分であっても、機械全体から離れてしまえば重要ではなくなります。同じように、絶対者のどの部分であっても、主の奉仕から離れてしまえば価値がなくなってしまいます。物質界にいる生命体はすべて至高の全体者から離れた部分であり、本来の部分体の重要性を失っています。しかし、永遠に解放され、主と結ばれている生命体もいます。ドゥルガー・シャクティ (Durgā-śakti)、あるいは牢獄の監督者と呼ばれる主の物質エネルギーは、離れてしまった部分体を動かし、こうしてかれらは物質自然の法則に縛られた生活をしています。この事実気づく生命体が、自分のふるさとへ、神のもとへ帰る

うとし、やがて生命体の精神的感情が高まります。この精神的感情をブラフマ・ジギャーサー (brahma-jijñāsā) 「ブラフマンに関する質問」といいます。おもにこのブラフマ・ジギャーサーは、知識、放棄心、主への献愛奉仕で達成されます。ジギャーサー (jñāna) ・知識は、ブラフマンすなわち至高者すべてにかかわる知識を指します。放棄心は物質的感情に対する無執着を指し、また献愛奉仕は、修練することで生命体本来の立場を甦らせる境地を指します。絶対者の世界に入る資格を得た生命体をジャーニー (jñāni) 、ヨーギー (yogī) 、バクタ (bhakta) といいます。ジャーニーとヨーギーは至高者の姿や形のない光のなかに入りますが、バクタはヴァイクンタ (Vaikuṅṭha) という精神的惑星に入ります。精神的惑星はナーラーヤナとしての至高主によって治められ、健全で条件づけられていない生命体が、召使い、友人、両親、恋人などとして主に愛情奉仕をしています。ここでは、束縛されていない生命体たちが、主と完全に自由な生活を満喫していますが、非人格論者のジャーニーやヨーギーたちは、ヴァイクンタ惑星から出ているまばゆい光のなかに入っていきます。ヴァイクンタ惑星は太陽のようにみずから輝き、その光をブラフマジョーティ (brahmajyoti) といいます。ブラフマジョーティは無限に広がっていますが、物質界はそのなかのわずかな一部であり、覆われた狭い部分にすぎません。その覆いは一時的ですから、まぼろしといってもいいでしょう。

純粋な献愛者ビーシュマデーヴァは、ヴァイクンタ惑星のひとつに入りましたが、ここでは主がパールタ・サーラティという永遠な姿で、主に仕えている自由な魂たちを統率しています。主と献愛者を結びつける愛情と愛着はビーシュマデーヴァの生涯をとおしてしめられています。パールタ・サーラティという主の超越的な姿を決して忘れませんでしたし、主も、かれが超越的世界に向かって他界しようとするときに居合わせました。これが人生の最高完成です。

第 4 5 節

तत्र दुन्दुभयो नेदुर्देवमानववादिताः ।
शशंसुः साधवो राज्ञां खात्पेतुः पुष्पवृष्टयः ॥ ४५ ॥

タトウラ ドウンドウバハヨー ネードウル
tatra dundubhayo nedur

デーヴァ・マーナヴァ・ヴァーディターハ
deva-mānava-vāditāḥ

シャシャンムスフ サーダハヴォー ラーギヤーンム
śaśamsuḥ sādhave rājñām

カハートウ ペートウフ プシュパ・ヴリシュタヤハ
khāt petuḥ puṣpa-vṛṣṭayaḥ

tatra—そのあと; dundubhayaḥ—太鼓; neduḥ—鳴らされた; deva—他の惑星から来た半神たち; mānava—全国から来た人々; vādītāḥ—〜で打ち鳴らされて; śaśamsuḥ—讃えた; sādhaveḥ—誠実な; rājñām—王族によって; khāt—空から; petuḥ—降らせ始めた; puṣpa-vr̥ṣṭayaḥ—花の雨。

そのとき、人と半神たちが称讃の太鼓を打ちならし、誠実な王族階級が名誉と敬意の表明を開始した。そして空から花びらが雨のように降りそそがれた。

要旨解説

ビーシュマデーヴァは、人類にも半神たちにも尊ばれていました。人類は、プール (Bhūr) とブヴァル (Bhuvar) 界にある地球や同じような他の惑星に住んでいますが、半神はスヴァール (Svar) 「天国の惑星」に住み、その住民すべてがビーシュマデーヴァを名だたる戦士で、そして主の献愛者であることを知っていました。人間ではありましたが、マハージャナ (権威者) として、ブラフマー、ナーラダ、シヴァの境地にいた人物です。偉大な半神と同じ気質は、精神的完成を達成したときだけに得ることができます。このように、ビーシュマデーヴァの名は全宇宙に知れわたっており、当時、惑星感の移動は、不完全な機械の宇宙船ではなく、より発達した手段が使われていました。ビーシュマデーヴァの他界が遠方の惑星に伝えられたとき、高位の惑星の住人や地上の住人は、物質界を離れていった偉大な人物を讃えて雨のように花びらを降らせました。天上から降らされる花びらは、偉大な半神たちによる承認の印であり、死体を飾るような程度の称讃ではありません。精神的完成を達成したビーシュマデーヴァの体からは物質的な影響がすべて消え、その体は、鉄が火に熱せられて灼熱化するように精神化されました。自己を悟った魂の体は物質的ではありません。精神的な体には特別な儀式が執行されます。ビーシュマデーヴァへの敬意と称讃はとかく模倣され、ありふれた俗人用のジャヤンティー (jayantī) 儀式という形で流行しています。権威あるシャーストラによれば、俗人のためのジャヤンティー儀式は、物質的にどれほど高い地位にある人間のためであっても、主への冒瀆です。なぜなら、ジャヤンティーは主が地上に降誕したときにおこなわれるものだからです。ビーシュマデーヴァのいきざまは比類のないものであり、神の国へむかって他界したこともたぐいまれな出来事だったのです。

第46節

तस्य निर्हरणादीनि सम्प्रेतस्य भार्गव ।
युधिष्ठिरः कारयित्वा मुहूर्तं दुःखितोऽभवत् ॥ ४६ ॥

タッシャ ニルハラナーディーニ
tasya nirharaṇādīni

サンムパレータツシャ バハールガヴァ
samparetasya bhārgava

ユディシュティラハ カーライトウヴァー
yudhiṣṭhiraḥ kāravitvā

ムフルタンム ドウフキヒトー バハヴァトウ
muhūrtam duḥkhito 'bhavat

tasya—彼の; *nirharāṇa-ādīni*—葬儀; *samparetasya*—死体の; *bhārgava*—ブリグの末裔よ; *yudhiṣṭhiraḥ*—マハーラージャ・ユディシュティラ; *kāravitvā*—それを執行して; *muhūrtam*—少しの間; *duḥkhitaḥ*—悲しんでsorry; *abhavat*—～になった。

おおブリグの末裔シャウナカよ。ビーシュマデーヴァの遺体のための葬儀を執行したあと、マハーラージャ・ユディシュティラはしばしその死を悼んだ。

要旨解説

ビーシュマデーヴァは、ユディシュティラ王の偉大な家系の長であったばかりでなく、優れた哲学者でもあり、王やその兄弟たち、そして王の母親の友人でもありました。マハーラージャ・ユディシュティラを筆頭とする5人の兄弟の父親であるマハーラージャ・パーンドウが亡くなったあと、ビーシュマデーヴァはパーンダヴァたちにはもっとも情け深い祖父であり、義理の娘で未亡人だったクンティーデーヴィーの世話人でした。マハーラージャ・ユディシュティラの叔父マハーラージャ・ドウリタラーシュトラは、兄弟たちの世話をする立場にありましたが、その愛情はドウリョーナをはじめとする100人の息子にそそがれていました。最終的には、父親のいない兄弟たちにあったハスティナープラ (Hastināpura) の王国を治める正当な権利を奪うために巨大な集団が組織されました。王宮ではよく起こる大規模な陰謀がめぐらされ、兄弟たちは荒れ地へ追放されました。しかしビーシュマデーヴァはマハーラージャ・ユディシュティラにとって、いつでも、否、自分が息を引き取るまで、哀れみ深く、5人の幸福を願う祖父、友人、そして哲学者でありつづけました。そして、ユディシュティラが王座に就いたことを見て心から満足して他界しました。さもないと、パーンダヴァ兄弟の不当な苦しみを見て苦しむよりは、とうの昔に肉体を捨てていたはずです。自分の主であるシュリー・クリシュナが5人を守っていたために、そしてパーンドウの子息たちがクルクシュートラで勝利を取めることを確信していたからこそ、ひたすら待ちつづけていたのです。自分自身が主の献愛者でしたから、献愛者はぜったいに、どんなときでも、征服されないことを知っていました。マハーラージャ・ユディシュティラも、ビーシュマデーヴァのそのような誠実な思いをよく知っていましたから、王の惜別の念を察することができます。その悲しみは、ビーシュマデーヴァが捨てた肉体に向けられたものではなく、偉大な魂との別れによるものでした。ビーシュ

マデーヴァが偉大な魂であったことはいうまでもありませんが、葬儀は必要な義務でした。子息がいなかったことから、偉大な孫マハーラージャ・ユディシュティラがその式を執行するにふさわしい人物でした。ビーシュマデーヴァにとって、同じ家族の偉大な息子が、偉人の最後の葬儀を執行したことは大きな恩恵といえます。

第47節

तुष्टुवुर्मुनयो हृष्टाः कृष्णं तद्गुह्यनामभिः ।
ततस्ते कृष्णहृदयाः स्वाश्रमान् प्रययुः पुनः ॥ ४७ ॥

トウシュトウヴル ムナヨー フリシュターハ
tuṣṭuvur munayo hr̥ṣṭāḥ

クリシュナンム タドウ・グヒャ・ナーマビヒヒ
kṛṣṇam tad-guhya-nāmabhiḥ

タタス テー クリシュナ・フリダヤーハ
tatas te kṛṣṇa-hṛdayāḥ

スヴァーシュラマーン プラヤユフ プナハ
svāśramān prayayuh punaḥ

tuṣṭuvuh—満足して; *munayah*—ヴァーサデーヴァたちを筆頭とする偉大な聖者たち; *hr̥ṣṭāḥ*—幸福な気持ちに満たされて; *kṛṣṇam*—主クリシュナ、人格主神に; *tat*—主の; *guhya*—秘奥な; *nāmabhiḥ*—主の聖なる名前などで; *tataḥ*—そのあと; *te*—彼らは; *kṛṣṇa-hṛdayāḥ*—心の中にいつも主クリシュナを思っている人物たち; *sva-āśramān*—それぞれの庵に; *prayayuh*—戻った; *punaḥ*—再び。

偉大な聖者たちが秘奥なヴェーダ聖歌を唱え、その場にいた主シュリー・クリシュナをこぞって讃えた。やがて聖者たちは、心に主クリシュナを思いつつそれぞれの庵にもどっていった。

要旨解説

献愛者はいつも主を思い、主もいつも献愛者を思っています。それが主と献愛者の甘露な関係です。献愛者は穢れのない愛情で奉仕をしているため、その心にはいつも主が住み、主もまた、何をするとも何かを熱望することはありませんが、献愛者が幸福になれるよう忙しくしています。ふつうの生命体にとって、自然の法則は活動と反動を作るためにありますが、主は、献愛者たちが正しい道を進むよういつも気遣っています。ですから、かれらは主から直接導かれているのです。そして主も献愛者だけの世話を受けようとします。そのため、ヴァーサデーヴァを筆頭とする献愛者の聖者たち全員が、葬儀が終わったあと、

その場にいた主を喜ばせるためにヴェーダの聖歌を唱えたのでした。ヴェーダ聖歌は主クリシュナを喜ばせるためにあります。このことは『バガヴァッド・ギーター』（第15章・第15節）でも確認されています。すべてのヴェーダ、ウパニシャッド、ヴェーダーンタは、主だけを悟るためにあり、すべての聖歌が主だけを讃えるためにあります。聖者たちは、その目的どおりにふるまい、心から満足してそれぞれの庵にもどっていったのでした。

第48節

ततो युधिष्ठिरो गत्वा सहकृष्णो गजाह्वयम् ।
पितरं सान्त्वयामास गान्धारीं च तपस्विनीम् ॥ ४८ ॥

タトー ユディシュティロー ガトウヴァー
tato yudhiṣṭhiro gatvā

サハ・クリシュノー ガジャーフヴァヤム
saha-kṛṣṇo gajāhvayam

ピタラム サントウヴァヤム アーサ
pitaram sāntvayām āsa

ガンダハーリーナム チャ タパスヴィニーナム
gāndhārīm ca tapasvinīm

tataḥ—そのあと; yudhiṣṭhiraḥ—マハーラージャ・ユディシュティラ; gatvā—そこへ行く; saha—〜と共に; kṛṣṇaḥ—主; gajāhvayam—ガジャーフヴァヤ・ハスティナープラという名の都; pitaram—自分の叔父（ドウリターシュトラ）に; sāntvayām āsa—慰めた; gāndhārīm—ドウリタラーシュトラの妻; ca—そして; tapasvinīm—女性の苦行僧。

そのあとマハーラージャ・ユディシュティラはすぐに、主シュリー・クリシュナとともに自分の帝都ハスティナープラにもどり、叔父と、そして苦行僧である叔母のガンダハーリーをいたわった。

要旨解説

ドウリョーダナとその兄弟の両親であるドウリタラーシュトラとガンダハーリー、そしてドウリョーダナの兄弟は、マハーラージャ・ユディシュティラにとって年上の叔父と叔母にあたります。名高いその夫婦は、クルクシェートラの戦争で息子や孫を失い、マハーラージャ・ユディシュティラに見守られて暮らしていました。耐えがたい喪失感のなかで苦悶の日々を送っていたかれらは、苦行僧のような生活をしていました。ドウリターシュトラの叔父であるビーシュマデーヴァの死の知らせは、王と王女にはあまりにも過酷だったことから、マハーラージャ・ユディシュティラからの慰めが必要でした。ユディシュテ

ィラ王は自分のすべきことを知っていたため、すぐに主クリシュナといっしょに二人のもとに駆けつけ、悲嘆に暮れていたドウリタラーシュトラに、ふたりで優しい言葉をかけたのでした。

ガーンダーリーは、誠実な妻として、優しい母として暮らしていた女性ですが、力強い神秘的力をそなえた苦行者でもありました。夫が盲目であったことから、自分も目を閉じて生きたのです。妻の義務は夫に100パーセント従うことにあります。ガーンダーリーの誠実さは、盲目の夫に死ぬまで従いつづけた、という事実にしめされています。たいへんな苦行だったはずですが、それだけではなく、100人の息子や孫たちをいちどに失った大きな悲しみは、女性にとっては耐えがたいものでした。それでも、その苦しみを苦行僧のように堪えしのんできました。女性ではありましたが、その気質はビーシュマデーヴァと遜色ありません。両者とも、『マハーバーラタ』に登場する非凡な人格者たちなのです。

第49節

पित्रा चानुमतो राजा वासुदेवानुमोदितः ।
चकार राज्यं धर्मेण पितृपैतामहं विभुः ॥ ४९ ॥

ピトウラー チャーヌマトー ラジャ
pitrā cānumato raja

ヴァースデーヴァーヌモーディタハ
vāsudevānumoditaḥ

チャカーラ ラーじゃんム ダハルメーナ
cakāra rājyaṁ dharmeṇa

ピトウリ・ピターマハンム ヴィブフフ
pitṛ-paitāmaham vibhuḥ

pitrā—叔父のドウリタラーシュトラによって; *ca*—そして; *anumataḥ*—その承認を得て; *rājā*—ユディシュティラ王; *vāsudeva-anumoditaḥ*—主シュリー・クリシュナに確証されて; *cakāra*—遂行した; *rājyam*—王国; *dharmeṇa*—王族のためにある規範に従って; *pitṛ*—父親; *paitāmaham*—先祖; *vibhuḥ*—〜と同じほど偉大な。

このあと、信仰心の篤い偉大な王マハーラージャ・ユディシュティラは、叔父の承認や主シュリー・クリシュナの支援を受けて、王族の権力を行使した。

要旨解説

マハーラージャ・ユディシュティラは、税金を集めるだけの王ではありませんでした。王としての義務をつねに意識していましたし、またそれは父親や精神指導者と同じ責任が

ありました。王は、市民たちが社会的、政治的、精神的に高められるよう見守らなくてはなりません。そのためにも、人間生活は肉体に閉じこめられた魂が物質の束縛から解放されるためにあることを熟知してい無くてはなりません。ですから、王の義務は、市民たちが最高完成の境地に到達できるよう適切に見守ることあります。

マハーラージャ・ユディシュティラはこれらの原則に厳正に従い、そのことは次の章で明らかにされていきます。従っただけではなく、政治事情に通じた年老いた叔父からも承認され、さらに『バガヴァッド・ギーター』の哲学を説いた主クリシュナからも支持をうけました。

マハーラージャ・ユディシュティラは理想的な君主であり、正しく訓練されたユディシュティラ王が率いる君主制政府は、人民の、人民による、という現代の共和体制あるいは政府よりもはるかに優れています。一般大衆は、とくにカリという現代では、すべてシェードラとして生まれ、基本的に生まれが卑しく、正しく訓練されず、不運で、忌まわしいつきあいをしています。人生の最高の完成の目標も知りません。ですから、大衆の投票には価値がなく、そのような無責任な投票で選ばれた人々が、マハーラージャ・ユディシュティラのような責任ある代表者になれるわけがありません。

これで、バクティヴェーダンタによる『シュリーマド・バーガヴァタム』、第1編・第9章、「主クリシュナのまえで他界したビーシュマデーヴァ」の要旨解説を終了します。